漢詩神奈川第二十号特別記念号

漢詩を学ぶ、漢詩で遊ぶ

神奈川県漢詩連盟十年の歩み

第2回神漢連吟行会　於鎌倉円覚寺舎利殿前　平成19年12月5日

漢詩神奈川

第　20　号
（十周年記念号）
神奈川県漢詩連盟
事務局
川崎市麻生区王禅寺西
2-19-3
TEL−FAX
044-965-4950
発行人　岡崎 満義
編集人　三村 公二

表紙の題字
「漢詩を学ぶ、
漢詩で遊ぶ」
は室橋幸子書による。

「神奈川県漢詩連盟十年の歩み」の刊行にあたって

社会的な浮力をつけよう

神奈川県漢詩連盟会長　岡崎 満義

私が漢詩を学び始めたのは出版社をリタイアして三年目の六十五歳のとき。その後、全日本漢詩連盟、神奈川県漢詩連盟の創立にかかわる幸運を得た。漢詩にかかわることで私は両手で受けてもこぼれるほどの果実をもらった。才能豊かな人材が神漢連に次々に集まってくる様を、私は驚き、うれしく思い、手をたずさえて活動してきたことをありがたいと思っている。「漢詩を学ぶ、漢詩で遊ぶ」を神漢連のモットーとして、のびやかに、ゆったりと活動できたと実感している。初代会長の故中山清さんの〝誠実まじめ路線〟をふみはずさないように、そこに遊びの要素も加えて進んでいく方向性がはっきりしてきたように思う。

スーパー少子高齢化単身者社会としての日本は世界のトップランナーで、もはやお手本とする国はない。手探りで生きのびる道筋を探していかなければならない。医療、年金、福祉の重みがずっしりと若い世代の肩にかかってくる。高齢者が社会的お荷物にならないためにどうすればいいのか。私は遊ぶことで社会的な浮力がついてくるのではないかと思っている。日本型のホモ・ルーデンス（遊ぶ人）の道を探索してみたい。神漢連の活動もその延長線上にある。一人遊びもよい。みんなで輪になって遊べたらもっと面白く、浮力も増すだろう。

こんど神漢連十年史を編んだのは、単に十年の歴史を記録するためではなく、温故知新、古きをあたためて新しきを知る、さらに未来に向けての活動スタイルを考えるためである。この十年史が会員のみなさん一人一人のチエをひき出し、「漢詩を学ぶ、漢詩で遊ぶ」のさらに具体的なスタイルを作り出す手立ての一つになってほしいと願っている。

神漢連の十年を祝う

全日本漢詩連盟会長　石川 忠久

神漢連が結成十年を迎えた。この十年は、他に例を見ない発展の軌跡を示した、と言えるだろう。

初代会長の故中山清さん、現会長の岡崎満義さんの牽引のもと、長老・中老から若手・新人まで、雲の如く集り、その活動は目を見張るばかりであった。

とりわけ、新聞に広告を出して新人を募集し、これをクラスに編成して、洒落た会名をつけ、先輩が乗りこんで指導する、それを積み上げ、バトルと称して互いに競わせる、というシステムをこしらえたのは、特筆に値いするものだ。〝金河新様式〟という所以である。

世の中には、「漢詩はもう終わった」などと言う識者もいるようだが、是非、この神漢連の活動を見てもらいたいと思う。

さはさりながら、日本の将来への展望を見る時、この状態がずっと続く、という保証はない。しからば、全日本漢詩連盟をリードしていく神漢連としては、次の十年にどのような新様式を案出し、識者たちの鼻を明かすのか。刮目して期待するものである。

会員諸氏のいよいよのご活躍を念じ、詩一首を添えてお祝いのご挨拶とする次第である。

慶賀神漢連創立十年　　岳堂山人

辛苦經營閲十年　辛苦経営　十年を閲し
鷗盟共喜作新篇　鷗盟共に喜こぶ新篇を作すを
請看金港晴嵐外　請う看よ金港晴嵐の外
千載芙蓉自儼然　千載の芙蓉自から儼然

目次

「神奈川県漢詩連盟十年の歩み」の刊行にあたって
社会的な浮力をつけよう　神奈川県漢詩連盟会長　岡崎 満義 …… 1
神漢連の十年を祝う　全日本漢詩連盟会長　石川 忠久 …… 2
祝辞　東京都漢詩連盟会長　窪寺 啓 …… 3

神漢連の設立経緯・理念と、十年の歩み(概要)
「漢詩を学ぶ、漢詩で遊ぶ」を目指して　神奈川県漢詩連盟十年の歩み　岡崎 満義 …… 4
漢詩の質は落とすべきでない　故中山清前会長を憶う　田原 健一 …… 8

神漢連設立後の主な活動の歩み
初心者入門講座とサークルの活動
寺子屋方式の着想　初心者入門講座 …… 9
前へ、さらに前へ向って　サークルの結成とその活動 …… 10
各サークルの紹介 …… 10
金星会、三水会、好文会、詩游会、五友会、以文会、七歩会、八起会、九詩期会、岳精会漢詩研究会
サークル間で切磋琢磨しよう
サークル交流会「バトル漢詩甲子園」 …… 16
研修会と吟行会
選句方式で一歩前進　研修会 …… 17
「柏梁体」で一喜一憂　吟行会 …… 18
会報の発行とホームページ
会報でしか繋がっていない会員へ　会報「漢詩神奈川」の発行 …… 20
臨場感あふれる画面　ホームページ …… 21
漢詩鑑賞会
画期的！輪講会のスタート　大簡会と佩文齋詠物詩選 …… 22
八十歳からの漢詩チャレンジ　故酒井謙太郎さんの思い出　桜庭 慎吾 …… 22
各種鑑賞会華やかに　漢詩鑑賞会概要 …… 23
熱意溢れる講義　漢詩鑑賞会A …… 23
難しい変体仮名の解説　漢詩鑑賞会B …… 24

祝辞

東京都漢詩連盟会長　窪寺　啓

神奈川県漢詩連盟創立十周年及び「漢詩神奈川」第二十号特別記念号刊行を慶賀致します。

顧みますと丁度二十年前、故濯堂石川梅次郎先生のご要望を受け、朝日カルチャーセンター横浜の漢詩作法講座の教室を引き継ぐことになりましたが、歳月の流れの早さを更めて感じて居ります。その頃、在籍して居られた方は中山葦舟前会長をはじめ、現在は一人も残って居られず感慨一入(ひとしお)です。

其の後、全日本漢詩連盟設立に伴い、神奈川県にも漢詩連盟を作るように中山前会長にお勧めした処、早速当連盟が結成され、あれよあれよという間に現在のような隆盛を誇る会になりました。これは中山前会長と其の志を継いだ会員皆様の協力の賜であります。

現在、漢詩は岡崎会長が言って居られます「絶滅危惧種」になろうとしていますが、会員方の力を起爆剤にして全国に漢詩の普及・発展が叶うよう願って居ります。

今後、私も出来得る限り「漢詩を学ぶ、漢詩で遊ぶ」のお手伝いをしたいと念願して居ります。

賀神奈川縣漢詩連盟創立十周年

神奈川県漢詩連盟創立十周年を賀す

騒客結盟金港頭　騒客盟を結ぶ　金港の頭(ほとり)
學詩探韻十春秋　詩を学び韻を探る　十春秋
如今隆盛蜻洲甲　如今の隆盛　蜻洲に甲たるも
李杜技心宜共求　李杜の技心　宜しく共に求めるべし

白文で詩を読み解く面白さ　漢詩鑑賞会C……24
神漢連の将来を担う女性　霧笛女子会……24

漢詩大会・漢詩集・出版

横浜の魅力を再確認した
横浜開港一五〇周年記念漢詩大会……25
詩力と詩品の向上を目指して
「神奈川清韻」第一集・第二集……26
他の県連からも注文殺到　神漢連叢書……27

漢詩普及に向けた外部との連携と情報発信

新聞に漢詩を出したい
神奈川新聞連載「漢詩への誘い」が実現するまで
岡崎　満義……28
横のつながりをふやそう
外部との連携と情報発信……29

その他

「竹林の七賢」をイメージして　竹林舎……29

資料編

■全日本漢詩大会／扶桑風韻漢詩大会／国民文化祭／プレ漢詩大会
神奈川県漢詩連盟会員入賞・入選者一覧……30
特別賞漢詩一覧……30
■全国ふるさと漢詩コンテスト(多久市)
神奈川県漢詩連盟会員入賞・入選者一覧……33
■神奈川県漢詩連盟　運営面の歩み……34
■神奈川県漢詩連盟　会員数の推移……35
□神奈川県漢詩連盟規約……36
□神奈川県漢詩連盟会員一覧……37

付記

神奈川漢詩連盟創立十周年記念行事……38
十周年記念行事協賛金寄金者氏名一覧……38
神奈川県漢詩連盟の「連盟印」が出来ました……40
神奈川県漢詩連盟会員　個人漢詩集一覧……40
編集後記……40

(本文注)神漢連＝神奈川県漢詩連盟
全漢連＝全日本漢詩連盟

神漢連の設立経緯・理念と、十年の歩み（概要）

「漢詩を学ぶ、漢詩で遊ぶ」を目指して

神奈川県漢詩連盟十年の歩み

会長　岡崎　満義

創設当時の写真：右より初代中山会長、石川先生、同夫人、窪寺先生、岡崎会長、礒野さん

平成十八（二〇〇六）年十月十四日に神漢連が創立された。平成十五（二〇〇三）年三月二十一日に全漢連が創立されて三年目のことである（注1）。

神漢連初代会長・故中山清さんは、「全日本漢詩連盟が発足してからはや三年を経過し、組織拡充ときめ細かな活動のために、各都道府県にも連盟をつくろうという機運が生まれてきました。相協力して、漢詩文化の振興は勿論、県単位でおこなわれています文化行事にも対応がのぞまれるわけです。関東地域でも、群馬、茨城、東京、千葉とあいついで組織が結成されてまいりました。こうした情勢の中で当県でも、昨年（平成十七年）秋より有志の方々と相談して準備に着手し、今年に入りましてからは準備委員が集まり具体的作業を進めて発会となった次第です」（「漢詩神奈川」創刊号＝平成十八年十二月刊）と書いている。

この中の「有志の方々」とは、田原健一、礒野衛孝、岡崎満義、水城まゆみ、桜庭慎吾の諸氏である。

中山清さん以下、有志はみんな朝日カルチャーセンター横浜の窪寺啓先生の「漢詩実作教室」に通うメンバーであった。窪寺教室は平成八年八月から、石川梅次郎先生のあとを引き継がれた教室である。月二回の窪寺教室のあと、有志が集まって設立準備の話し合いができるという〝地の利〟があった（注2）。

その窪寺先生には神漢連の顧問をお願いし、総会、漢詩サークル交流会、吟行会など現在に至るまでさまざまな局面で指導をいただいている。はかりしれないほどの大きな側面援助である。

◇　◇　◇

（注1）創立総会の会場は横浜技能文化会館八階。創立時の会員数七十八名、うち出席者数約六十名。

（注2）準備活動は、県下漢詩人、吟社、書道家への働きかけ、規約案作成、役員人事、予算案作成、創立総会設営等多岐にわたった。また、東京、千葉の連盟関係者からも助言を戴いた。

神漢連が順調に発展してきたのは、初代会長・故中山清さんの存在があったればこそ、と岡崎は思っている。

◇　◇　◇

「窪寺教室に入って五年目に神漢連ができ、私は副会長をおおせつかった。その五年間で中山さんに対する信頼感は次第に強くなった。高潔、温雅な人柄、作詩の抜群の実力に心服していた。気のおけない間柄になって、雑談をしているうちに、中山さんは協和発酵出身で、東大時代は坂口謹一郎博士の愛弟子と知って一層親しみが湧いた。坂口謹一郎著『愛酒楽酔』は私の愛読書であり、酒を心底愛し、短歌をよくし、達意の文章家、いわば現代では稀有の『文人化学者』としてまぶしいほどの存在だった。その愛弟子である中山さんは、醸造学で日本学士院賞を受賞している。アカデミズムの中でもきわ立った研究者であった中山さんは、協和発酵時代には社内に『短歌クラブ』を作り、歌人の吉野秀雄さんをときどき講師として招き、短歌を勉強し、早くから師・坂口博士のあとを継ぐ文人化学者の道を歩む人だと知って親愛・尊敬の気持ちがますます深くなった。私は吉野秀雄さんの最後となった原稿『リウマチと双眼鏡』(文藝春秋昭和四十年四月号掲載)を依頼して、吉野邸に何度か足を運んだことがあったので、中山さんの〝文人気質〟にひかれていった。この人と一緒にやれば、神漢連は着実に発展するだろうと確信できた。

中山さんが醸造学研究者時代をふりかえって作った漢詩が残っている。

臘月醞醸

酒庫無人夜正深　酒庫人無く夜正に深し
静聴醸甕有微音　静かに聴く醸甕微音あるを
已知醗酵今將盛　已に知る醗酵今将に盛んならとす
芳醇明春花底斟　芳醇明春花底に斟まん

この詩には恩師坂口博士の『冷え冷えと寒さ身にしむ庫のうち泡の消えゆく音かすかなり』という短歌と、ご自身の『凝視せる顕微鏡下に細菌は馳驅し止まざる生きざまを見る』が添えられている」。

◇　◇　◇

中山会長を支えたのが田原健一事務局長である(注3)。田原さんは「中山会長は夢を語る人ではなく、実際的なアカデミズムの研究所長的な人、プロフェッサーだった」と言う。

(注3)準備活動の比較的早い段階で、中山前会長は実務の責任者として田原事務局長を指名した。また、活動内容として、中山前会長は「研修会」、「吟行会」、「初心者入門講座」の三本柱を示した。

中山前会長の最大の功績は「初心者入門講座」を開き、毎年一人で講師を務め、漢詩愛好者をふやし、卒業制作を課したあとは漢詩サークルを作り、勉強会を続けていくというシステムを作ったことだ。このとき、中山さんのいささか高踏的な教壇授業方式を補うかたちで、〝寺子屋方式〟という少人数個別授業方式を導入したのが田原さんだった。

田原さんはきびしい中山授業についていけなくて脱落しそうになる人には必ず手紙を書いて翻意を促し、一人でも多く神漢連会員として留まるように努力した。この人の心をつかむ温かいアフターケアの手法は、そのあとの事務局長、桜庭慎吾、三村公二さんに今もひき継がれている。目には見えないが、このアフターケアの手厚さも、神漢連の大切な伝統となっている。

平成二十年の総会で恒例の漢詩に関する講演をお願いした全漢連会長の石川忠久先生は、そのあとの懇親会で神漢連についての七絶を披露された。

鷗盟創會僅三年　鷗盟会を創めてより僅か三年
春夏秋冬稽古全　春夏秋冬稽古全し
可看金河新様式　看る可し金河の新様式
師生雲集滿詩筵　師生雲集して詩筵に満つ

左から
礒野衞孝、水城まゆみ、田原健一、岡崎満義、
桜庭慎吾、玉井幸久の各氏

初心者入門講座から始まって、各種勉強会、吟行会、漢詩サークルの勉強会などを続ける神漢連の活動を「神奈川の新様式」と名付け、大いに称揚していただいた。その四年後、総会にあわせて会員に呼びかけて手持ちの不要になった漢詩関係書の古書即売会を開いて大賑わいだったことを見て、石川先生はまた七絶を披露された。

絲絲細雨浥薔薇　糸々たる細雨薔薇を浥し
七次會同初夏時　七次の会は同じく初夏の時
今歲重加新様式　今歳重ねて加う新様式
詩書滿卓賣爲資　詩書卓に満ち売りて資と為す

この「神奈川の新様式」という言葉はどれほど神漢連会員を元気づけたことだろう。漢詩の大御所・石川先生にお墨付きをいただいたことで、自分たちの活動に自信を深め、次のステップを確信をもって踏み出すことができた。これほどありがたい激励の言葉はない。最初の神漢連叢書「七言絶句ここから一歩」についても、石川先生から温かいはげましの序文をいただいている。石川先生のはげましの言葉が神漢連の進取の気風にさらに拍車をかけたといっていい。

◇　◇　◇

神漢連は当初から詩吟、書道など漢詩に縁のある組織と手をつなぎたいという気持ちをもっていた。会員を漢詩実作だけに限って孤高を守るより、漢詩愛好者に広く門戸を開放し、共に漢詩を学び、漢詩で遊ぶ組織でありたいと願った。

日本書道学院の石川芳雲さん、全国的な詩吟の会・岳精会の横山精真宗家とも連絡を密にし、神漢連理事に就任してもらった。岳精会には初心者入門講座を〝出前授業〟して漢詩サークルを作り、自詩自詠をすすめている。現在も東京・新宿の会場で第二次の入門講座が続いている。三上光敏さんの詩吟の会「湘清会」でも会長・岡崎が毎年「酒とユーモア」などの講演を続けている。

それ以外にも神漢連設立の前後、圓谷照男さんの「湘南吟社」、岡田泰男さんの「座間詩吟連盟」、玉井幸久さんの「横浜市栄区未来塾漢詩講座」、鎌倉の佐藤敏彦さんの「中国の名詩を詠う会」などとも密接な連絡をとってきた。

それは会員増につながり、活動の幅を広げた。そのような個別的な〝漢詩活動〟が神漢連の中に流れ込んできて〝平和共存〟して、神漢連の活動にふくらみをもたせることになったようだ。

玉井さんは「漢詩を作ることに特化しすぎない方がよい。作ることはタテ軸、鑑賞するのはヨコ軸と考えて、バランスのよい

〝漢詩グラフ〟を描くことが必要だ」と提言している。神漢連十年の歩みをふり返ってみると、この玉井さんの指摘の方向に確実に動いているといっていい。

もう一つ、その方向に沿った活動の大きなきっかけになったのは「大簡会」の発足である。平成二十二(二〇一〇)年、国文祭岡山で漢詩大会が開催され、その記念に阿藤伯海「大簡詩草」が復刻された。阿藤伯海は岡山出身で昭和最後の漢詩人と言われた人で、弟子の一人・作家の清岡卓行「詩礼伝家」に生前の姿がみごとに描かれている。詩集「大簡詩草」をテキストに十数人の輪読会が故酒井謙太郎さんを中心に始まった。約二年で読み終わり、今は「佩文齋詠物詩選」をテキストとして輪読会は続いている。この経験をもとに、漢詩鑑賞会A、B、C(「七言絶句ここから一歩」)、霧笛(無敵)女子会など充実した活動が広がっている。

霧笛女子会のリーダである古田光子、水城まゆみさんの漢詩活動も目覚ましいものだ。古田さんは朝日カルチャーセンター湘南で、水城さんは新百合ヶ丘の産経学園で、それぞれ「初心者入門講座」の講師を務めている。十年目を迎える神漢連の初心者入門講座と相まって、漢詩普及の大きな拠点となっている。

◇　◇　◇

初心者入門講座が始まって十年、金星会、三水会、好文会、詩游会、五友会、以文会、岳精会漢詩研究会、七歩会、八起会、九詩期会などの漢詩サークルができ、それぞれ勉強会を続けているが、これらのサークルから連盟の運営委員が一名ずつ執行理事会に出席することになり、協力して連盟の運営に当たっているのは大きな力である。

漢詩サークルは人材・いや人財の宝庫なのだ。中山清前会長時代は強力な機関車が車輌を牽引するかたちの連盟運営だったが、岡崎現会長になって、多くの各車輌ごとにエンジンをもつ列車が連なって進むイメージが色濃くなってきた。「漢詩を学ぶ、漢詩で遊ぶ」を多彩に展開するには、このような連盟運営手法により大きな可能性があると思われる。

(この稿は、岡崎満義、玉井幸久、礒野衞孝、田原健一、桜庭慎吾、水城まゆみ、三村公二各氏の座談会をもとに岡崎がまとめた)

神漢連の歴史は「漢詩神奈川」で！

バックナンバーはホームページで見られます。
http://www.shinkanren.sakura.ne.jp/kaihouichiran.html

2006(平成18)12. 15
漢詩神奈川
創刊号
神奈川県漢詩連盟
横浜市旭区中沢3-39-9
電話045-361-2033
FAX045-361-2033
発行人 中山 清
編集人 田原 健一

神奈川県漢詩連盟　誕生！　会員82名にてスタート

◆神漢連発足。記念すべき創刊号。設立から二か月、設立総会の報告など。(平成一八年一二月)

2008(平成20)7. 15
漢詩神奈川
第4号
神奈川県漢詩連盟
横浜市旭区中沢3-39-9
電話045-361-2033
FAX045-361-2033
発行人 中山 清
編集人 田原 健一

新しい風を力に！二十年度連盟総会開かる

◆設立から二年。研修会・吟行会・新人研修講座など、充実の活動を報告。(平成二〇年七月)

◆開港一五〇周年漢詩大会開催、全国漢詩大会の協賛など、新しい試みへのチャレンジ。(平成二一年一月)

2009(平成21年)2. 5
漢詩神奈川
第5号
神奈川県漢詩連盟
(〒241-0814)
横浜市旭区中沢3-39-9
電話045-361-2033
発行人 中山 清
編集人 田原 健一

港に響け！横浜の詩　開港150周年漢詩大会に参加を

◆『神奈川清韻』第一集の発刊を控え、吟行会も益々好調。上り調子の神漢連。(平成二三年一月)

2011(平成23)
漢詩神奈川
第9号
神奈川県漢詩連盟
横浜市旭区中沢
3－39－9
電話045-361-2033
FAX045-361-2033
発行人 中山 清
編集人 田原 健一

天青、水碧、潮風爽！「城ヶ島秋の吟行会」快晴に恵まる

◆十号から題字を石川芳雲先生の書に変更、十二号からは印刷を業者に依頼。(平成二四年七月)

漢詩神奈川
第12号
神奈川県漢詩連盟
事務局
横浜市栄区笠間
5-3-2-103
TEL-FAX
045-895-2662
発行人 岡崎 満義
編集人 桜庭 慎吾

漢詩の仲間を増やし、会員の拡大を図ろう
―神奈川県漢詩連盟総会開かる―

◆そして十周年。様々な漢詩大会で会員が入賞するなど、益々成長する神漢連。(平成二八年一月)

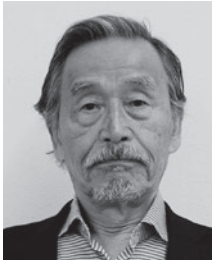
漢詩神奈川
第19号
神奈川県漢詩連盟
事務局
川崎市麻生区王禅寺西
2-19-3
TEL-FAX
044-965-4950
発行人 岡崎 満義
編集人 三村 公二

神漢連創立十周年、さらに未来に向けて

(関連記事二〇頁)

漢詩の質は落とすべきでない
故中山清前会長を憶う

ありし日の中山清前会長



田原　健一

中山会長の詩にこんなのがある。おととしの春頃の詩である。

黒帽

退隠迂翁號散人　退隠の迂翁　散人を号し
出時着帽豈無因　出時の着帽　豈因無からんや
遮陽匿禿世間事　遮陽　匿禿　世間の事
形狀宛如烏角巾　形状宛かも烏角巾の如し

さほど気を惹くこともない平易な詩である。が、今は亡き御大を憶う時、どうしてもこの帽子の詩が思い出される。烏角巾とは隠者のかぶる黒い頭巾で、杜甫の詩に「錦里先生烏角巾、園収芋栗未全貧」とある。ご本人はきっと錦里先生になったつもりで愛用されていた筈である。傍から見れば田舎の夫士然とした恰好で、いつも、とことこと、あまり風采が上がるとも思えない帽子を被って、自らの元気を確かめるように足早に歩かれていた様子が思い出される。

御大の詩は、オーソドックスな風景に徹した作が多く、春秋の風物を、紀行先の情景を安定した詩興と卓越した造詣の深さで詠い上げられていた。詩を教える立場から、風物の写実を基本にと口を酸っぱく言っておいでであったし、それを実践されていた。その意味では揺るぎなく漢詩の本流を歩まれた方である。只、後年は遊びの感興にも意欲の幅を拡げられ、冒頭の詩のように、自己述懐から時事問題、小さい生き物の蟹や土竜など自在の境においでであったし、巧まざる雅味、ユーモアに驚かされたものである。

神漢連の会長として発足から去年まで精力的に活動され、現在の連盟の基盤を盤石のものにして頂いた。特に初心者入門講座で、五年間講師として教壇に立たれたご苦労は、全くの素人が相手だけに傍から見ても大変なものであった。

指導は厳しかった。画家の生徒さんが自分の絵に漢詩を画賛として載せたく気軽な気持ちで参加されていたが、「そんなやわな気持ちでは漢詩は作れない、絵に専念しなさい」と冷然と言い放たれた。一瞬、場は凍りついた。次回からその人は来なくなった。漢詩を作る人を増やしたいと苦労している事務局としては、そこまで厳しく切り捨てないでくれと内心反発もした。以後、教室では憎まれ親父と労わる母親とお互いの役割分担が形成されていった。

また会長の、神奈川の漢詩の質は落とすべきでないとの姿勢は、会報や記念の詩集の応募の詩のレベルにまで及び、折につけ厳しく言及された。会員を増やし親善の輪を拡げたいという横への拡がり志向と、漢詩の質は落としてはならない保つべきであるという水準維持向上の問題は、横軸縦軸の関係として、今も連盟の活動の中で絶えず意識され、両々あいまった行事が脈々として続いている。

病床にお邪魔して、話し合えないもどかしさを手と手を握り目と目で探りあったこと、何を訴えたかったのか、ここ五～六年の連盟の仕事への述懐なのか、後事への想いなのか、今となればしかとは判らない。茫々の想い出である。

神奈川の漢詩村は貴方のお蔭で豊かな畑となり、若衆が張り切って耕しています。村人も増えていっています。どうか後のことは、ご心配なく、心安らかにお眠りください。

（この文章は、凡そ四年前のものであるが、故中山清前会長の人柄がよく出ているので、敢えてそのまま掲載した）

神漢連設立後の主な活動の歩み

初心者入門講座とサークルの活動

寺子屋方式の着想　初心者入門講座

初心者に対する漢詩の指導は、吟行会・研修会と並んで神漢連創立の頃より、故中山清前会長の中心的構想であった。平成十八年十月の設立総会以降、その構想の具体的実施内容が検討され、その概略は次のようであった。

(一)平成十九年四月より初心者入門講座を開講し、四、五、六月の三か月間、毎月二回、七月に補講。九月に卒業制作と修了式。以上のカリキュラムで七言絶句の作詩ができるよう指導する。

(二)以上のコース終了後は自主的に同期生で勉強会(現在のサークル)を結成し研鑽を深めると共に、神漢連本部より講師を派遣する(二期生より実施)。そして、一回ずつ卒業して区切りをつけていくアイデアは田原さんより提起された。

(三)初心者入門講座の受講者は、その受講料を以ってその年の年会費に充てる。これは優遇制度による会員の増加がねらいである。

(四)受講者の募集に当たっては、当時、吟社・詩吟・書道等で指導されていた理事の先生方に生徒さん達を紹介して戴く。

(五)また七回目より朝日・毎日・読売・日経・神奈川・サンケイの各紙のカルチャー・文化欄に、初心者入門講座開講の記事を記載してもらった事が応募者の増加につながり、近年は五十名を越えるようになった。

(六)平成二十四年度に立ち上げた神漢連ホームページからの応募者もあり、又会員の紹介によるなど、これまでの募集の諸施策が相俟って効果を上げてきた。

平成十九年四月の第一回より、平成二十三年の五回まで中山会長の講義で、その内容は作詩法と鑑賞を併せたものであった。

中山会長の講義がスタートした頃、内容がやや難解で、このままでは落ちこぼれが出るかもしれないと危惧した田原事務局長(当時)は、咄嗟の判断で、休憩を挟んだ授業が再開された時、受講者を三、四名ずつ、五～六グループに分け、陪席していた役員を一名ずつそこに配置し、小グループによる個別指導の方式を採った。これが後に言う寺子屋方式の着想で、詩力に応じて個別指導をする〝神奈川方式〟の重要なカリキュラムとして成熟してゆくのである。

石川忠久先生が平成二十年の総会の賀詩のなかで〝看る可し金河の新様式〟と、それを採り上げてくださったことは記憶に新たなことである。

以上寺子屋方式誕生のエピソードを紹介させて戴いたが、敷衍して考えてみると神漢連の諸事業を運営する上で、その時々の状況に応じて最善と考えられる対策ないしは施策を講じてゆくことが重要であることが、確認できる。

また草創期の役員として礒野衛孝氏の貢献の大なることも記しておきたい。氏は主宰する「鎌倉漢詩会」より初心者入門講座に多くの初心者の紹介をいただいた。そして漢詩作のルールを例えば、

①　一行の　二字目白なら　四字目黒
　　六字目白で　二と六は対
②　その孤平　三・五黒の　義侠心
　　どなたか白と　お替り下され

のように判り易い短歌に歌い込んで、初心者に平仄や孤平の禁止などの漢詩作の規則が自然と身に付くように努めた事は特記される。

開講より平成二十三年の五期生までの授業を担われてきた中山先生は平成二十三年十二月に突然に他界された。このことにより平成二十四年度からの初心者入門講座は、創草期の役員と新たに運営委員の任に就いた若い世代の人達と合議制で運営されることになり、これも平成二十六年度の事務局長の桜庭から三村への移行に伴って全面的に若い世代にバトンタッチされることになる。（桜庭慎吾 記）

前へ、さらに前へ向かって
サークルの結成とその活動

初心者入門講座の終了後に結成される各サークルは、神漢連の組織運営の中核として位置付けられる。半年間という僅かの期間ではあるが、連帯感というか同期生意識が働き、サークルの結成につながっている。これまでのサークルの結成の足跡は左頁表と各サークル紹介の記事に詳しいが、その運営についてふり返ってみると、一期生から五期生までは中山会長を中心として創草期の役員がコーチングスタッフとして指導役を果たしてきた。そしてこの時の一期生の中から、例えば岳精会を指導、二期生からは八期生や九期生を指導する人が生み出され、また四期生からは六期生や七期生のコーチを担う人が生まれるなど…順送りに先輩から後輩に伝わる教育の連環システムが自ずと構築されるようになった。

この様に自主的に結成されたサークルは、その運営の為に代表幹事他数名の幹事によって、ほぼ隔月毎に勉強会が開かれ、予め会員に配付された詩稿の互評が始まる。互評は作詩の動機や語句の措辞が妥当であるかどうか、率直な意見の交換が行われ詩の理解が深まる。また平成二十四年五月頃から、勉強会が作詩の方に偏ると途中で脱落者が生じる等の問題も提起され、これに対する方策として、カリキュラムに作詩と鑑賞の両方を組み入れ、また鑑賞会（A・B・C）を運営して、会員ニーズに繋げ組織への定着を図るなどの工夫を講じている。

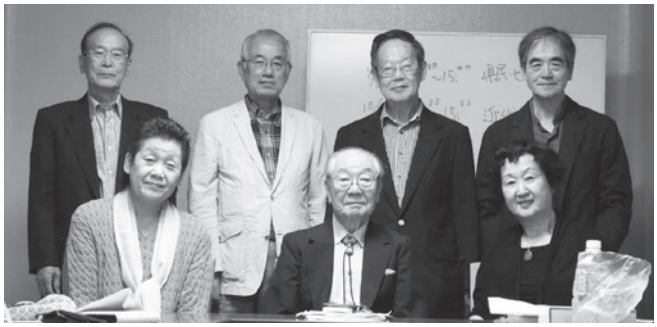
（桜庭慎吾 記）

各サークルの紹介

東天に輝く〝太白〟のように
「金星会」（一期生）

当初は「初度の会」と称した。初度とは物事の第一回目、初回或いは最初のこと。第一期生としての自負からこの「初度」を使った。正式な結成は平成十九年十二月二十日。会員数は十六名。指導は同サークルメンバーの一人梅本光男氏だった。

その後、サークル名を「初度の会」から「金星会」へ変更し、現在に至っている。



「金星」は中国名で〝太白〟、これは李白の字であり、明け方東天に輝く「明けの明星」「明星」、また夕方西空に輝く「宵の明星」「夕星」などである。因みに現在会員六名で、当初からの会員は二名。指導は飯沼一之先生である。

■漢詩初心者入門講座と漢詩サークル一覧

開催年区分	受講者数	サークル名	会員数	代表者	指導者	開催月開催曜日	開催場所
平成一九一期生	二二名	金星会	六名	三上光敏	岡崎満義 飯沼一之	偶数月第二火曜	県民センター
平成二〇二期生	二七名	三水会	一三名	中島龍一	古田光子	奇数月第三水曜	アカデミービル
平成二一三期生	二一名	好文会	九名	高津有二	城田六郎	偶数月第三木曜	県民センター
平成二二四期生	二五名	詩游会	一〇名	川上修己	田原健一 住田笛雄	偶数月第二火曜	公文書館
平成二三五期生	三八名	五友会	九名	土屋昇三 飯島敏雄	田原健一	偶数月第二木曜	労働プラザ
平成二四六期生	三九名	以文会	一四名	柴田　洋	桜庭慎吾 池上一利(四)	奇数月第三木曜	近代文学館
平成二四岳精会	四九名	岳精会 漢詩研究会	一二名	家吉幸二 礒邉邦雄	城田六郎 三村公二(一)	偶数月第三水曜	岳精会事務所
平成二五七期生	二三名	七歩会	一三名	喜多　基	水城まゆみ 川上修己(四)	奇数月第四水曜	労働プラザ
平成二六八期生	三六名	八起会	一五名	中島義和	住田笛雄 中島龍一(二)	奇数月第三木曜	開港記念館等
平成二七九期生	四八名	九詩期会	二一名	山口幸雄	古田光子 大谷明史(二)	奇数月第二木曜	八洲学園大学
平成二七～二八千代田岳精会	四五名			山口隆久			明治生命ビル
平成二八十期生	二八名						

(注)指導者名の後の括弧内の数字は、何期生かを表す。
入門講座受講終了後、サークルに入らなくても神漢連に所属している人も多数いる。
サークル会員数は平成二八年四月一日現在。

なお、例会終了後は駅ビル地下で一時間半程度の懇親会を持つのが慣例。例会の楽しみのひとつだ。また、世話人(幹事)の負担軽減のため、次回例会向けに自己の作品について会員数分のコピーを用意して交換する仕組みを採用している。(三上光敏 記)

大衆割烹の座敷で
「三水会」(二期生)

二期生の会だが、三水会という名である。この意味は第三水曜日(奇数月)が例会ということを、会員が忘れないようにするための命名である。場所は横浜駅西口の大衆割烹の座敷部屋を確保して、三時から五時までが勉強会、五時から直ちに懇親会となる。

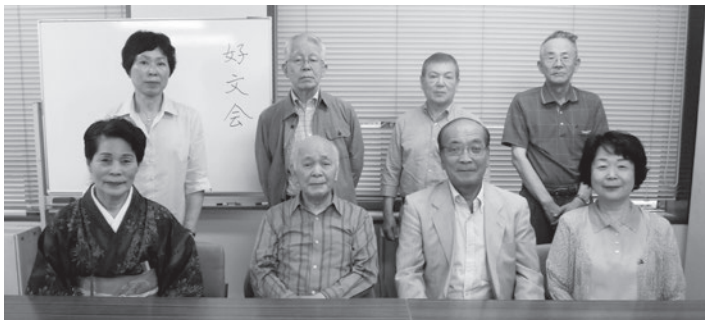
会員十三名で古田光子先生を囲んでの宴会が楽しみで、毎回出席率が九十パーセント以上と盛会である。

三水会の特色は、皆さんが作詩七年目なので勉強会の発言が活発ということである。そして批評だけでなく、批正・添削の詩語を提案することが多くなっている。作者はそれに反論することもあるが、最終的には古田先生の言葉を頂いて作者が納得することになる。

詩力の向上はかなり明瞭だが、詩風が人それぞれに固まってきている傾向が認められる。例えば故事を多用した教訓的な詩を好む人、身近な生活の詩を好む人、自己の昔の体験を詩に詠う人など、個性がだんだんと分化してきた感がある。これはこれで良いことと思っている。　（中島龍一　記）

五周年で「好文会詩集」を刊行
「好文会」（三期生）

平成二十一年度の初心者入門講座に参加した第三期生の会の名称は好文会である。徳川斉昭が「弘道館賞梅花」の転句の中で学問奨励の視点から梅の異名を「好文木」という中国の故事から使用したものを拝借した。講師の先生は城田六郎先生、桜庭慎吾先生でスタート、途中桜庭先生から三村公二先生に交代となり、現在は城田先生おひとりにご指導頂いている。



われわれ三期生は、「好文」の名に恥じることなく、詩力の向上に精進しており、会のスタート以来六年以上が経過したが、二カ月に一回の例会とその後の懇親会は一度も中止することなく継続している。

平成二十六年には設立五周年を記念して、「好文会詩集」を全員の手作りで発刊できたことは会員一同のこの上ない喜びである。昨年は横浜港クルーズの吟行会を開催し、今後は年一回の実施を定着させたいと考えている。会員の高齢化は致し方ないが漢詩に取り組む意欲だけは失うことなく、全員が元気で十周年の詩集発刊を期しているところである。　（高津有二記）

吟行会や観月の会を催す
「詩游会」（四期生）

平成二十二年四月、初心者入門講座に参加した三十名弱の方々が会の発足の始まりである。六回の研修を終え第一回会合（参加者二十六名）は、その年の十二月に行われた。先ず会の名称を決めることから始まった。会員からの提案もいくつかあったが、住田笛雄先生の発案は「詩遊会」で詩と四（四期生）を掛け、詩で遊ぶというものであった。これをチョット風流に遊を游として、正式名称「詩游会」と命名した。神漢連の趣旨でもある「遊ぶ」にマッチしていると思っている。一～二年間は十～二十名が作詩して会合も盛大に行われたが次第に参加者は減少して最近は十名で固定している。

我々の最初の吟行会は平

成二十五年九月、山形の上山温泉にて「観月吟行会」と銘打って、蔵王に昇る満月を看て詩嚢を肥やした。旅では斎藤茂吉記念館、山寺、芭蕉記念館など訪れている。その後、箱根(三体詩の勉強会)、鎌倉(古寺参拝と抹茶の会)、大倉山観梅(探梅)、伊豆長岡と吟行会を重ねている。平成二十七年は小田原まちづくり応援団と共催で、「清閑亭」(公爵黒田長成邸)にて長成侯漢詩集「櫻谷集」の朗読(詩吟)と観月の会を開催した。

これらの成果を踏まえて、昨年は詩游会発足五周年を記念した詩集の発行を行った。これには一人五首の詩とその詩にまつわるエピソードも添えてあり、詩ばかりではなく読んで楽しめる詩集となっている。

(川上修己 記)

中野三琴さんの茶室の楽しみ
「五友会」(五期生)

「五友会」の「五友」は次の三つの意味を持っている。一つめは五期生の友の会。二つめは人生で持つべきは「二師三兄五友五弟」という中国の諺の中の五友。三つめは漢詩によく出てくる竹・梅・蘭・菊・蓮の五種を五友と呼ぶので「五友会」という名は以上の三つの意味を込めた。

現在会員は九名であり、半数近くの方は詩吟をされており、他の方々は水墨画や書、寺の散策、囲碁などを趣味にしており、それぞれ自詠自吟、自詠自書、寺に関する詩作り、囲碁の詩作りなどが将来の目標である。当初は田原健一先生と高津有二先生の指導の下で詩力を養っていたが、平成二十六年十月からは田原先生のみに指導していただいている。初めのうちは平仄の間違いや詩語かどうかを指摘されたが、今は詩の中身が議論の中心になってきている。

なお時折会員の中野三琴さんの茶室で「陶淵明や蘇軾など」を茶話にしながら煎茶をいただき、その後は前回予め提出済みの詩について批正を行っている。なお、通常の勉強会の後はビールや酒を飲みながら懇談し、親交を深めている。

漢詩を作り始めてから丸四年、そろそろ詩集の出版をしたいと考えている。

(飯島敏雄 記)

自由闊達の勉強会
「以文会」(六期生)

平成二十四年四月五日に三十九名の応募者による「初心者入門講座」を六期生として受講する。十月終了と同時にOB会として、漢詩の世界に一歩踏み込んだ(現在十四名、内男性十一名、女性三名)。講師は桜庭慎吾先生と中島龍一先生をお招きしてご指導を賜る。会の名称としては「六芸会」「六氣会」「六義会」なども候補に上がったが、「以文会」と決定した。謂れは論語・顔淵篇の「曾子曰く、君子は文を以て友を会し、友を以て仁を輔(たす)く」であり、内容に深みのある名称となった。

例会は自由闊達で、最近では詩語の〝使い方、意味〟などの突っ込んだ質疑が多くなり熱気を帯びている。

また二十七年には「以文会詩

集」の発刊に漕ぎつけ、さらに三渓園で吟行会を行った。

以文会の皆は、漢詩鑑賞や作詩の勉強に熱心であり、以下の多くの教室を各人各様に選択し、さらに研鑽に努めている。

◇神漢連の会では、漢詩鑑賞会A・B・C、女子霧笛会

◇神漢連外の会では、石川忠久先生の東京教室、窪寺啓先生の東京・横浜教室、古田光子先生の藤沢教室、水城まゆみ先生の新百合ヶ丘教室、礒野衛孝先生の鎌倉教室に参加。

なお、中島龍一先生は二十六年九月より池上一利先生に交代している。

（柴田洋 記）

「七歩の才」の故事にあやかり
「七歩会」（七期生）

第七期初心者入門講座の卒業生のサークルが平成二十五年十二月十一日に発足した。サークル名は、魏の曹植が兄の文帝の命によって七歩歩む間に詩を賦したという「七歩の才」の故事にあやかり、会員の詩才の向上を願ってのものである。

未だ七言絶句を詠むのに、七歩ならぬ万歩を要している。平仄等の作詩規則は一応会得してよちよち歩きの第一歩を踏み出せたが、思いや詩情を二十八文字で表現するのに四苦八苦している状態である。例会では、和気藹藹ながらも切磋琢磨して風雅の道を共に歩んでいこうと志している。

（喜多基 記）

七転び八起きに懸けた
「八起会」（八期生）

八起会は平成二十六年度の初心者コース第八期を修了した三十三名の中から希望者二十一名で結成し、同年十一月から活動を開始した。

会の名前を検討するにあたっては八生会、八星会、八起会、末広会などの案が提案され、皆で侃々諤々検討した結果、八起会に決定。卒業詩作に七顛八倒した直後だけに、七転び八起きに懸けた八起会に票が集まった。

本年三年目に入るが現在女性六名男性九名計十五名がメンバーとして定着し、住田笛雄先生、中島龍一先生のご指導の下研鑽を重ねている。漢詩作りの面白さがようやく解り始めたのと同時に、難しさにも直面して悩みも多く、会の終了後には毎回先生を囲んで近くのカフェで歓談しアドバイスを頂いている。

またメンバーには書や詩吟を嗜む人も多く、昨年度は神漢連有志による自詠自書の会に六名が出品し実行主体を担った。今後は先輩サークルの経験に学び吟行会等も計画し、「漢詩を学ぶ、漢詩で遊ぶ」八起会を目指して皆で歩んでいく。

（中島義和 記）

〝奇しき縁〟で出会い学ぶ
「九詩期会」（九期生）

「九詩期会」（くしきかい）の会名を「きゅうしきかい」と読まれたことが何度もあるが、決して「旧式」の会ではない。神漢連の中では一番新しい、入門講座第九期生の会である。初心者二十一名がフレッシュな気持ちで漢詩に取り組んでいる。

会名候補には、研修会の開催日が第二木曜日だから「九木会」（きゅうもくかい、きゅうきかい）とか、「ここのつの会」「九思会」「九天会」「神九会」（しんくかい）「九貴会」などが並び、中には内実を直接的に表現した「苦吟会」というのもあった。最後に選ばれたのが「九詩期会」（くしきかい）である。知らない者同士が漢詩という「奇しき縁」で出会い、九期の会として共に学び共に遊ぶという意味が込められている。

まだまだ漢詩そのものが「奇しきもの」の段階だが、古田光子、大谷明史両先生のご指導のもと、少しずつ勉強を重ね、「奇しき縁」を大事に楽しく会を進めていこうとしている。

（山口幸雄 記）

自詠自吟の楽しみを目標
「岳精会漢詩研究会」

平成二十三年九月に岳精流総本部（宗家・横山精真）において、漢詩初心者講習会の開催が募集され、十一月十九日に神漢連・岡崎満義会長ら三名の先生により漢詩づくりの手ほどきを受けたのが最初である。翌年十月までの一年間、前期・後期十回の講習会の後、平成二十五年一月より岳精会漢詩研究会としてスタートし、城田六郎先生・三村公二両先生による熱血指導が続いている。

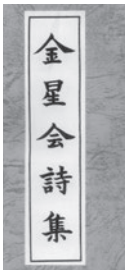
宗家が神漢連に既に加盟していたことから吟詠を学ぶ会員と共に漢詩づくりを学ぼうと賛同、研究会発足時点で十八名となった。名称由来は、私達は岳精流日本吟院の会員であり、研究会スタート時点で、「岳精会漢詩研究会」のネーミングが阿吽の呼吸で決まった次第である。

試行錯誤を続けながら漢詩の奥の深さと出来上がった時の歓びを噛みしめながら、人生生涯教育に相応しく、漢詩を作り、それを書にしたため、そして吟ずることの楽しみを目標に励んで居る。

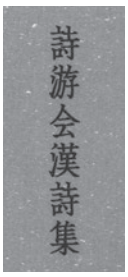
（家吉幸二 記）

現在発刊されているサークル詩集

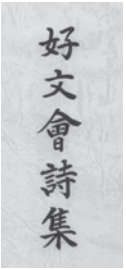
□金星会詩集（一期生）
平成●●年●月発行
●●判　●ページ



□詩游会詩集（四期生）
平成●●年●月発行
●●判　●ページ



□好文会詩集（三期生）
平成●●年●月発行
●●判　●ページ



□以文会詩集（六期生）
平成●●年●月発行
●●判　●ページ

サークル間で切磋琢磨しよう
サークル交流会
「バトル漢詩甲子園」

窪寺啓先生が研修会で皆さんが何をやっているかを見学に来られた時、たまたま、漢詩大会で何時も賞を取っておられる方の素晴らしい詩が二点しか入らず、典故の意味を取り違えて使った詩が最高得点を取ったのをご覧になって、〝研修会は人気投票になっていて良い詩を的確に評価していない〟とおっしゃられた。それでは、サークルの皆さんに集まってもらって窪寺先生のお話をお聞きしようではないかという事になった。

サークル交流会の第一回は平成二十三年に窪寺先生の講演会という形で実施した。しかし、会員の中から只お話を聴くだけでなく、もっと前向きにサークル間でお互いに切磋琢磨して詩の優劣を論じ合う場が欲しいとの声が挙がった。

そこで二回目から、サークル交流会は「バトル漢詩甲子園」と命名された。世の中では、全国の高校生対象の甲子園として野球だけでなく「クイズ」「俳句」「まんが」などが行われているが、頭に「バトル」と付けたのは、岡崎満義会長の面白おかしくという強い要望があったからである。

「バトル漢詩甲子園」では、各サークルで過去一年間で最も出来の良い詩を会員相互で選出し、当日は各サークルから選ばれたバトラー（論者）が詩の優劣について討論を行うというものである。

窪寺先生に予め詩を提出しておき、論戦後に先生の添削結果とバトル内容の妥当性も含めた漢詩作法の講義を受けた。講義終了後には、先生に選ばれた優秀作品について表彰が行われ、続いての懇親会では、各サークルの喉自慢が自分達の選んだ漢詩を朗吟して懇親会を盛り上げた。

平成二十七年三月のバトルでは各サークル共通の詩題が良いとの意見を受け、窪寺先生から「金港雪朝」の詩題を頂いてバトルを実施した。また、岡崎会長からは参加者全員で提出された詩稿の人気投票を行ってはどうかとの意見があり、投票結果では窪寺先生が選ばれたのとはかなり異なる結果となり、これまた一興として大いに盛り上がった。

懇親会は例年通り会場を移して実施されたが、吟詠をはじめ楽しいスピーチが飛び交ってサークル間の交流を深める有意義なものであった。窪寺先生からは懇親会場で次の即興玉詩を頂いた。

懇親會席上卽詠　　窪寺貫道

闘詩戰罷港邊樓　詩を闘わせ　戦い罷む　港辺の楼
歳歳更爲翁媼遊　歳々　更に為す　翁媼の遊び
料峭春風吹萬里　料峭　春風　万里を吹き
各聲赫赫滿蜻州　各声　赫々　蜻州に満つ

平成二十八年度は十周年記念行事の漢詩大会等があり実施を見送ったが、二十九年度からはまた新たな趣向を取り入れて実施していく事を計画している。

（高津有二記）

■サークル交流会(バトル漢詩甲子園)一覧

回	開催年月日	開催場所	参加者	判定者	最優秀賞	特記事項
第一回	平成二三年一二月　二日	近代文学館	五サークル			窪寺貫道先生の講演「漢詩作法上達のコツ」
第二回	平成二五年　三月一五日	横浜中華街(菜香新館)	七サークル	窪寺貫道先生	『秋夜偶成』飯島敏雄(五友会)	・各サークル二首提出　・入賞漢詩吟詠
第三回	平成二六年　三月　七日	近代文学館	八サークル六四名	窪寺貫道先生	『白菊』秋吉邦雄(以文会)	・各サークル一首提出　・入賞漢詩吟詠　・揮毫作品展示
第四回	平成二七年　三月　六日	近代文学館	九サークル六九名	窪寺貫道先生	詩題『金港雪朝』上田尤子(金星会)	・窪寺先生提示の課題詩　・自分の好きな作品投票　・各サークル一首提出　・入賞漢詩吟詠　・揮毫作品展示　・フォト&漢詩展示

研修会と吟行会

選句方式で一歩前進　研修会

神漢連が平成十八年十月に発足し、会員の詩力向上を目指して、第一回目の研修会が翌年一月二十四日に横浜開港記念館で開催された。出席者は二十二名であった。

中山前会長自ら毎回出席されて、厳しくも適切な指導をされた。平成二十年春の研修会の際に、俳句会で行われている選句会方式が提案され、その後その方式が踏襲されている。その年の秋の研修会から、大変喜ばしいことに参加者が四十名前後となったので、二回に分けて開催することになった。なお平成二十五年からは三回に増加した。

最初のころは、田原健一事務局長(当時)が、うまく会をリードして研修の実を挙げていたが、選句方式が導入されたことにより、全員が発言の機会にめぐまれたように思われる。研修会一回の参加人員を二十名程度に絞ったことと相まって、一首当りの時間が増え十分に議論を尽くすことができ、研修会の成果が一段と向上した。最初のころは、平仄の誤り、詩語の重出、脚韻相違等のミスが頻出したが、最近では極めて少なくなっている。

平成二十四年春からは、上位入賞者に岡崎会長より奨励のための賞品が贈呈されることになった。それか、あらぬか二十五年春の出稿者は六十二名の多きに達した。

■春及び秋の研修会一覧

開催年	春の開催月日	参加者数	高得点者	秋の開催月日	参加者数	高得点者
平成一九	①一月二四日	二二名	―	①一〇月二三日	二二名	―
平成二〇	①六月一二日	二〇名	―	①一一月　四日 ②一一月一一日	三七名	水城まゆみ 飯沼一之
平成二一	①六月一一日 ②六月二四日	― 一六名	― 礒野衛孝	①一〇月二七日 ②一一月一九日	三七名	三橋保三 桜庭慎吾
平成二二	①六月一六日 ②六月二四日	四一名	吉岡昭夫 中島龍一	①一一月　九日 ②一一月一七日	四〇名	大谷明史、水城まゆみ 岡崎満義、岡田泰男
平成二三	①六月一五日 ②六月二三日	四二名	田原健一 内村才五	①一〇月一一日 ②一〇月二七日	五三名	大谷明史、吉岡昭夫 中島龍一 上田尤子、宇津井寛
平成二四	①六月一二日 ②六月二六日	五三名	大谷明史 三村公二	①一〇月　九日 ②一〇月二四日	五三名	岡崎満義 大原真理子
平成二五	①六月　四日 ②六月一二日 ③六月一八日	六二名	松本征儀 三村公二 秋吉邦雄	①一〇月一〇日 ②一〇月一六日 ③一〇月二二日	五〇名	板本健作 横溝喜久男 柴田　洋
平成二六	①六月　四日 ②六月一〇日 ③六月二四日	五〇名	斉藤　護 大谷明史 秋吉邦雄	①一〇月　七日 ②一〇月一五日 ③一〇月二二日	四四名	秋吉邦雄 芝　公男 板本健作
平成二七	①六月　三日 ②六月　九日 ③六月二三日	三五名	喜多　基 丹下和幸 大森冽子	①一〇月二〇日 ②一〇月二八日	四三名	芝　公男 横溝比呂美
平成二八	①八月二五日 ②八月三一日					

（注）開催場所は通常は神奈川近代文学館。

研修会制度が発足して十年になろうとしているが、やや気掛かりなのは出稿者の顔触れが、固定化してきていることである。尚、研修会は、初級者にとっては、その詩稿に対して上級者から各種の指摘を受けられる場であり、また広く上級者の作詩を学べる機会でもある。このようなメリットを踏まえて、初級者にもどしどし参加してもらうような方策を検討することが今後の課題であろう。（城田六郎 記）

「柏梁体」で一喜一憂
吟行会

吟行会は、神漢連設立翌年の平成十九年四月に金沢文庫の称名寺で三十二名の参加者をもって第一回が開催され、その後平成二十八年五月の横浜港クルーズまで、この十年間で十四回開催されている。そのうち神漢連単独が八回、東京都漢詩連盟との共催が四回、栃木県漢詩連盟との交流が二回となっている（吟行会一覧参照）。

吟行会の楽しみは、名所旧跡を訪ねたり、風光明媚な景観を満喫するだけでなく、吟行後に行われる懇親会で会員相互の親睦を

深めることにある。

更に、毎回石川忠久先生、窪寺貫道先生にご参加頂き、謦咳に接して、漢詩についての有意義なお話を伺い、直接ご指導を頂く貴重な機会となっている。

また、吟行会ではちょっぴり緊張感を味わうことができる。それは、中国、漢の武帝が柏梁台を築いた時に群臣達を集めて作らせたことに由来する「柏梁体」である。

毎回、参加者一人ひとりに吟題韻字の一字が与えられ、平仄不問の七言一句を懇親会までに提出することになっている。自分で引き当てた韻字に一喜一憂する風景も見られるが、二、三時間もあれば七言一句は何とかなるものである。懇親会場では石川先生に優秀句を選出して頂き、自分の名前を読み上げられた時は生みの苦しみが喜びに変わる時である。

吟行会は毎年一回の開催を予定しており、行先や実施内容について、会員の皆さんのご意見を頂いて、より楽しいものにしたいと考えている。

（高津有二記）

■吟行会一覧

開催年	春の開催月日	開催場所	参加者数	秋の開催月日	開催場所	参加者数
平成一九	四月三〇日	金沢文庫（称名寺）	三二名	一二月　五日	北鎌倉（円覚寺他）	四四名
平成二〇				一二月　六日	鎌倉（大仏長谷寺）	四二名
平成二一				一一月　八日＊1	元町中華街	十数名
平成二二	三月三〇日	小田原城	四二名	一〇月二六日＊2	栃木・足利	四三名
				一一月二九日	城ケ島	三八名
平成二三				九月一三日	江の島	四二名
平成二四	一月二五日＊3	元町中華街	三四名	九月二五日	京急運休で中止	
平成二五				一一月二六日	鎌倉（源頼朝墓他）	三四名
平成二六	二月二二日＊4	横浜三溪園	四三名	一〇月三〇日＊5	真鶴半島	五九名
平成二七				九月二六日＊6	上野動物園	三〇名
平成二八	五月一二日	横浜港クルーズ	三四名			

＊1・2 栃木県・神奈川県漢詩連盟交流吟行会　＊3～6 東京都・神奈川漢詩連盟共催吟行会

会報の発行とホームページ

会報でしか繋がっていない会員へ
会報「漢詩神奈川」の発行

会報のネーミングは様々な案があったが、最終的には故中山清前会長が「漢詩神奈川」が簡単明瞭と断を下していただいて決まった。むしろどう作るかが心配であった。小生には中学時代、謄写版でクラス新聞を作った経験だけしかなかった。今さら紙鉛筆でもあるまいと、パソコンの「ワード」を勉強した。書式とかフォントを嫁いだ娘に電話して難解な世界に悪戦苦闘した。

創刊号から第九号までの担当した会報は、A4の紙に字数行数を整えた三段を鋏で切って貼り付け、表裏の版下を作って近所の文房具屋さんに持ち込んで大量コピーしてもらっていた。印刷とはほど遠い、写りも少々ぼやけている代物であった。ただコストは安く、紙代コピー代併せて八円に値切っていた記憶がある。逆に郵便局が大量発送なのに百二十円きっちり取られる。内心腹が立って、クロネコヤマトが八十円郵送にふみ切った時は快哉を叫んだものである。

中身で議論になったのは、会報での漢詩応募への対応策であった。沢山集まったらどうするか、中山会長が選者となり良い詩だけ載せる、稚拙な詩は切り捨てる、添削して返却する、いろいろ議論があったが、杞憂であった。幸か不幸か、会員からの応募詩は今に至るまで殆どない。皆さん謙虚なのである。その辺りのニーズは詩集「神奈川清韻」で吸収するということにした。

随分と失敗もした。誤字脱字はもちろんのこと、原稿の無断訂正や切り捨てもお構いなし、まったくの専制君主の編集であった。こんな例もあった。「研修会に出席して」という自家製原稿で、一番好感がもてた詩としてIさんの詩を紹介したら、〝名月〟の字句が和語であるとして事前に中山会長の指摘を受けたが、出来上がっていたので、あってもいいと感情的に押し切った。ところが今度は教室で窪寺啓先生から指摘を受けた。正直に参った。今でもIさんと中山会長に対し慙愧の思いが消えない。

絶えず頭にあったことは、会報でしか繋がっていない会員の存在であった。そういう一般会員の方に漢詩への関心を少しでも呼び覚まし、そこにどう連盟を意識させるかであった。

そして平成二十三年の第十号より、増勢をつづける会員への対応策として、読みやすい紙面づくりのために印刷を専門の業者に委ねることになった。これにより、印字と写真の鮮明度のアップ、紙面の体裁の改善を図ることができた。また、編集もこれまでの一人よりプロジェクトチームによる複数人編集体制を導入し、記事の内容充実に意をそそいだ。また平成二十四年四月より始動した神漢連のホームページを活用して平成二十六年より、神漢連の全会報が検索できるようになった。

最近の漢詩鑑賞を始めとする一連の連盟の活動は、会報でしか繋がっていない会員層へのアプローチとしてたいへん心強い。ただ、その誘いとても参加しない、参加できない人たちはいる。今後も会報の役割は絶えず底辺まで考えて作って欲しい。

最近の会報は、質量ともども素晴らしい。紙面から原稿の寄せ集めでない連盟活動の熱気が伝わってくる。担当の方々の努力の賜物であろう。今後とも充実した楽しい会報であって欲しい。

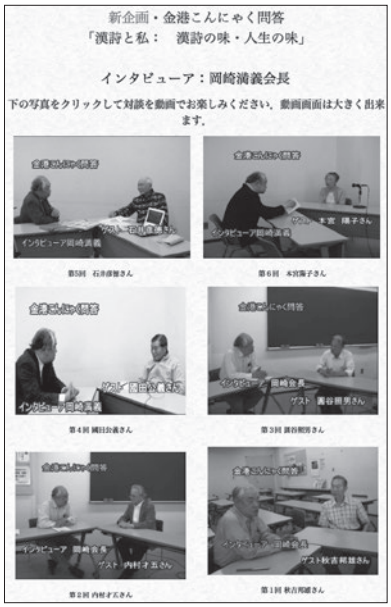
（田原健一　記）

臨場感あふれる画面
ホームページ

平成二十三年末、神漢連も設立して五年を過ぎようとしており、そろそろホームページを開設して、連盟の活動を会員のみでなく一般の人々に広くPRするとともに、新たな会員を募る一助にしようということになり、ホームページ委員として三上光敏さん、川上修己さんおよび筆者が選任された。

ホームページで重要なことは、その見映え、内容、およびそれらの更新である。そこで、トップページには玉井幸久先生による有名な漢詩の鑑賞と、国田公義先生や田原健一副会長に描いていただいたその詩の情景が浮かぶような絵（または写真等）を配置し、その左側にこのホームページで閲覧できる内容に飛べる項目を配置した。当初の項目は「神奈川県漢詩連盟とは」、「初心者入門講座（募集要項）」、「開催行事」、その行事の内容やニュースを写真入りで紹介する「トピックス」、著者を変えての連載記事「エッセイ・漢詩と私」、初心者入門講座終了後に結成された吟社の紹介「漢詩サークル」、「会員の作品（漢詩）」、講演を記録する「講演会」、創刊号から最新号までの会報を閲覧できる「会報・漢詩神奈川」等の構成にした。漢詩鑑賞と絵は毎月、また各項目の記事は二～三か月毎に更新することにした。会報は年二回しか発行されないが、ホームページはより早く情報を伝えることができる。このようにして念願の神漢連のホームページは平成二十四年四月に開設された。

http://www.shinkanren.sakura.ne.jp



翌二十五年にはいろいろな行事の紹介に動画や音声を導入して、臨場感あふれる画面が見られるよう改善を行った。またトップページの詩を着物姿の室橋幸子さんに中国語で朗読していただくのを撮影した動画も加えた。さらに平成二十六年十月には岡崎満義会長自らインタビューアーになって漢詩と私というテーマでいろいろな会員と対談する「金港こんにゃく問答」の動画が追加された。平成二十八年四月には開設して四年を経過したので更なる充実を図り、直近の行事やニュースおよび漢詩募集中の漢詩大会等を伝える「連盟からのお知らせ」や、主に初心者講座修了生からの漢詩作りを始めた動機などの記事「会員からの投稿」や、上記以外の記事「特別寄稿」および「漢詩作り参考図書の紹介」の項目を増やした。

既にこの四年余で閲覧者数は八千名を超え、またこのホームページを見て、初心者入門講座や連盟の会員申し込みが出ている。今後も視聴者や会員の声を聞くなどして魅力あるホームページ作りに努め、「漢詩を楽しみ、漢詩を作ってみたい」という人がより多く出てきてくれることを願っている。

（飯島敏雄 記）

漢詩鑑賞会

画期的！輪講会のスタート
大簡会と佩文齋詠物詩選

平成二十二年二月、昭和の大詩人と云われた阿藤伯海の「大簡詩草」が復刻刊行された。この白文の詩集を手にされた故酒井謙太郎さんは田原健一さん（当時事務局長）と相談し、中～上級を対象に勉強会を始めては如何かと提案された。

白文の詩を読み解くことは仲々難しい。詩語の解釈は勿論のこと、詩の生まれた背景や、そこに詠われている人物のことも解明しておかねばならぬ。そしてその年の秋から、横浜開港記念館を会場として十余名の構成による輪読会がスタートした。会の名は酒井さんが、伯海の雅号をとって、「大簡会」と命名された。

一年半程かけてほぼ読み終わった所で、次のテキストについて検討している席で、智慧者の住田笛雄さんから「佩文齋詠物詩選」に挑戦しては如何かと提案が有り、江戸期の館柳湾本と取り組むことになった。清の康熙帝の勅撰のアンソロジーである「佩文齋詠物詩選」は、天文・山・川…のように属目する事物によって分類されており、作詩や詩の解読に裨益する所が大きいと思われた。読み進んでいくうちに、特に典故を読み込んだ詩に当ると、船が陸に上がったように難儀した。こんな時に酒井さんは、事前に「圓機活法」などでよく調べられ、助け舟を出して下さり、これがまたメンバーを大いに啓発することともなった。

この大簡会は今も続いているが、その勉

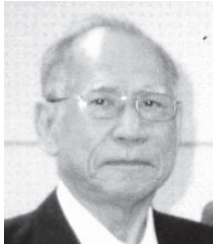
八十歳からの漢詩チャレンジ
故酒井謙太郎さんの思い出

桜庭 慎吾

岡崎満義会長は「七言絶句ここから一歩」の序言に〝漢詩・大簡会村長は酒井謙太郎さん〟と記している。ところが残念なことに病魔に冒され平成二十七年十一月に幽明境を異にした。享年九十二歳。

ここで、大簡会創始の恩人である酒井謙太郎さんの思い出を記し、神漢連の結束と会員の詩力の向上に尽くされた事に対し深甚の敬意をささげたい。

酒井さんは大正十二年岐阜県に生まれ、昭和十八年、東京大学法学部在学中に学徒出陣により南方に従軍。航空隊基地の建設に挺身されたと承っている。そして終戦に際し、兵卒の無事の撤収を確認し、自らは殿（しんがり）を務めた責任感の強い人であった。実業を退かれた後、八十歳より漢詩作を始められ、数年にして全日本漢詩大会或は神漢連の開港一五〇周年記念大会において優秀賞を得られている。


ありし日の
酒井謙太郎さん

後のことになるが、亡くなられた後、御家族の厚意により大簡会のメンバーが酒井さんの書斎に招かれた事があった。その机辺にはノートが十冊余程積まれ、日夜漢籍に向われ、孜々として詩語や優れた字句を抜き書きされていた姿が彷彿と目に浮かんだ。曽つて水戸の国民文化祭の折、特別賞に輝いた〝郭北郭南花又花〟の句が掲額されていた。この句は石川忠久先生が激賞されていた句である。そして平成二十四年には漢詩集「素庵閒情集」を上梓されている。この詩集のなかからご自身で最も好きだと言われていた詩を紹介する。

憶青春　　酒井謙太郎

浩歌傲世望青雲　浩歌世に傲（おご）りて　青雲を望み
酣醉多情依絳裙　酣醉情多くして　絳裙に依る
不慮年移嘆黃耇　慮（おも）わざりき年移りて黃耇（こう）を嘆き
寒窗吟句對紅曛　寒窓に句を吟じて紅曛に対せんとは

強の成果が城田六郎さんの「七言絶句ここから一歩―佩文齋詠物詩選七絶抄―」の刊行につながってゆく事になり、酒井さんの播かれた種子が神漢連のなかで芽生え、着実に成長している事を感じる。

（桜庭慎吾 記）

各種鑑賞会華やかに
漢詩鑑賞会概要

漢詩鑑賞会の開催が初めて話題に上ったのは平成二十五年五月の総会終了後の反省会の時である。当時、神漢連の会員数は二百余名で、その半数以上は入門講座を経たサークル会員であったが、他の七十名前後の会員はサークルに属しておらず、この人達に漢詩を楽しむ場を提供しようというのが当初の趣旨であった。

話題が出たその場で、その通りだ、やろうじゃないかと具体的な提案を玉井理事と住田監事からいただいたので、七月の執行理事会で鑑賞会A、鑑賞会Bと命名し、参加者を募集した。その結果、多数の参加希望者があってスタートしたのだが、目標であったサークル会員以外の人達に加えて、当初は予期していなかったサークル会員が多数参加した。

ここで特筆すべきは、それまでは入門講座を経て詩作は難しいからと退会していった人達が、退会せずに鑑賞会に参加するようになってくれた事である。これが今や鑑賞会の大きな役割の一つとなっている。

鑑賞会Cはそれより遅れる事二年、平成二十七年六月に神漢連叢書として発刊した「七言絶句ここから一歩」の詩の解説・講義という形で開講した。講師は竹林舎の城田・飯沼・桜庭の三人の舎友にお願いしている。

又、平成二十六年には男子禁制の女性だけの漢詩鑑賞会を古田舎友のご指導の下に開講した。岡崎会長が霧笛（無敵）女子会と命名、女性会員の楽しみの場となっている。

◇鑑賞会A　「唐詩選」の講義

講師　玉井幸久

毎月第四木曜日　あーすプラザ

世話役　瀧川智志、斎藤護、久川憲四郎

◇鑑賞会B　「唐詩選画本」の輪読会

コーディネータ　住田笛雄

毎月第四金曜日　公文書館

世話役　池上一利

◇鑑賞会C

「七言絶句ここから一歩」の講義

講師　城田六郎、飯沼一之、桜庭慎吾

毎月第四火曜日　近代文学館

世話役　中島龍一、川上修己

香取和之、久川憲四郎

◇霧笛女子会

「女性が対象の漢詩等」の講義

講師　古田光子

偶数月第一火曜日　近代文学館

世話役

水城まゆみ

久川愛子

小菅幸枝

（三村公二 記）

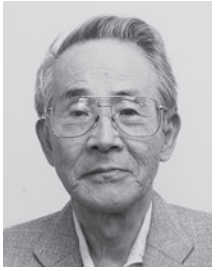
熱意溢れる講義
漢詩鑑賞会A

漢詩鑑賞会Aは玉井幸久先生が、自編「漢詩を楽しむ―平成人の漢詩鑑賞」と石川忠久先生編「漢詩鑑賞事典」を中心に唐代の漢詩を順次解説するのを聞き、鑑賞する会である。会は平成二十六年一月に始まり、孟浩然から、李白、杜甫と進み、現在は白楽天の詩を鑑賞している。講義は、通釈にとどまらず、詩人の足跡を地図の上で尋ね、時代背景や同世代の詩人との交流など、先生の熱意溢れる幅

玉井幸久先生

広い解説となっている。まるで同時代を詩人と一緒に旅して語らっているような気になる時さえある。

出席者は三十名前後である。また、先生の講義肉声・全資料が神漢連のホームページから検索できるのも魅力の一つである。



（瀧川智志 記）

難しい変体仮名の解説
漢詩鑑賞会B

住田笛雄先生

漢詩鑑賞会Bグループは、住田コーディネータの発案により「唐詩選画本」の七言絶句を有志による輪読会という形式で行おうということになった。唐詩選の解説本は多数出版されているが「唐詩選画本」については少ない。詩にはそれにマッチした鈴木芙蓉等の手による挿絵が添えられているばかりでなく、詩の解釈が後家流崩し字で付いている。

この変体仮名（崩し字）の解読が難しくもありまた面白い。担当者の努力により毎回読み解いている。同時に作者の経歴、詩の背景、難語の解釈・典故等多くを勉強して新たに漢詩の奥深さに感激している。尚、参加者は十五名前後である。

（川上修己 記）

白文で詩を読み解く面白さ
漢詩鑑賞会C

「七言絶句ここから一歩」をテキストとした講義は城田・飯沼・桜庭の三人を講師として、平成二十七年六月より同二十八年六月まで、輪講の四巡目で、百四十四首を読み終えたこととなる。講義用の原稿の作成に当たって各講師は、その下調べに十分な時間を当て、あまりなじみのない詩語や典故の解明に意を尽くした。そして書き下し文、通釈については原則として予め講師が目を通しているので、大きな誤りはないものと考えている。三人寄れば文殊の知恵を実践している。

講義は詩の解説を主体に進めているが、受講者の人達には白文で詩を読み解く面白さを身につけて欲しいと願っている。毎回四十～七十名の参加者があり、会場から寄せられる質問には受講者の熱意が溢れ、今後の進展が楽しみである。　（桜庭慎吾 記）

神漢連の将来を担う女性
霧笛女子会

女性の活動を促す為に平成二十七年に発足したばかりの新しい会である。名前は色々案が出たが、横浜にちなんで岡崎会長の案が一番斬新だったので、無敵という意味も掛けて霧笛女子会になった。

神奈川の女性会員は休眠会員を除くと四十名位である。この会は作詩はしないので気軽に来られるのが人気の理由である。

隔月の第一火曜日に毎回二十名位の会員が集まり、歴史上の主に悲劇の女性について、古田光子理事よりお話を伺っている。いつも年表と地図を参考に時代背景や場所などの確認をしながら興味深く勉強している。

新入会員から八十八歳の古参の会員まで次の講義の日が来るのを楽しみにしている。会の後半は会員からの発表など。今までに横溝比呂美さん、上田尤子さんによる唐詩選画本の中の詩について調べられたことの発表があり、これも大変好評である。

会の終了後はおしゃべりに花を咲かせてこちらの方も賑やかである。今後の神漢連の将来を担う女性の活躍に大いに期待している。

◇　◇　◇

参考までに平成二十七年度に行った講義内容を列記する。

二月　桃夭(詩経)
　　垓下歌(項羽)虞美人
四月　悲愁歌(烏孫公主)
　　烏孫公主(白居易)
六月　陳皇后(阿嬌)―長門怨(岑參)
　　李夫人歌
八月　怨歌行(班婕妤)
　　西宮秋怨(王昌齢)
十月　題桃花夫人　即息夫人　(杜牧)
　　緑珠
十二月　長恨歌(白居易)一段(①②)
二月　　長恨歌(白居易)二段(①②)
　　三段(①)

(水城まゆみ 記)

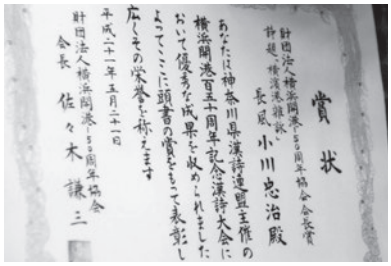
漢詩大会・漢詩集・出版

横浜の魅力を再確認した 横浜開港一五〇周年記念漢詩大会

平成二十一(二〇〇九)年、横浜の町が開港一五〇周年ということで、横浜市を筆頭にいろいろな行事がいろいろなところで企画され、祭りが始まるぞと街は色めき立ってきた。ならば我々神漢連も横浜の風物をテーマにした漢詩大会を開催してお祭りに加わろうと企画した。

大それた企画ではあった。それだけに我々スタッフもやるからにはと意気が揚がった。思いたってから十か月、役員一同夫々に何かの荷物を背負って動いた。記念行事の推進母体である横浜開港一五〇周年協会を軸として、役所、新聞社など後援先の確保や、全漢連の応援、選者の石川忠久及び窪寺啓両先生の支援、各地県連への呼びかけPR等、忙しい毎日を送った。

今思えば、これを機に神漢連の役員の結束がさらに高まったように思える。


賞状

応募作品は二百七十編、まずまずの数であった。特別賞五首、優秀賞十首、入選二十九首を石川・窪寺両先生に選んでいただいた。賞状や特別賞の掛け軸の書字は石川芳雲先生他の方々にお願いした。

表彰式は神漢連総会に入賞者をお呼びして行った。長崎や岡山など県外からの入賞者のご出席はなんと二十一名にも及んだ。嬉しかった。総勢八十四名の盛大な総会となった。もちろん作品集は小冊子にして刊行し、当日配布した。

当日配布された小冊子

応募いただいた方の七割は地元ではなく、他都府県の人であった。横浜に対する憧憬の詩であった。遠く離れていても、港町横浜の風景歴史が、その印象が、人を強く惹きつけてやまない証とみられた。自分の住む街を、住めば都、何処も変わりなしと深く考えもしなかったが、横浜のこの街は愛されているのだと改めて思った。

祭りを終えての実感は、漢詩でもって、この港の歴史の節目を讃え奉げることができたなあ、地域との繋がりとはこういうことなのだろうかという充足感であった。

（田原健一　記）

◇　◇　◇

以下は特別賞を受賞した神漢連会員の詩。

神奈川新聞社賞　酒井謙太郎

横濱開港資料館中庭玉楠木

昔年蟹舎一汀洲　横浜開港資料館中庭の玉楠木
今日虹橋千尺樓　昔年　蟹舎（かいしゃ）　一汀洲
港畔蒼蒼老樟樹　今日　虹橋　千尺の楼
應懐桑海幾春秋　港畔　蒼々たり　老樟樹
　　応に懐うべし　桑海の幾春秋

全日本漢詩連盟　会長賞　大谷明史

開港横濱村　開港横浜村
通商盟契竟開門　通商　盟契　竟（つい）に門を開く
賈館潮聲風滿軒　賈館（こかん）　潮声　風満軒
晩夏水邊樓上月　晩夏　水辺　楼上の月
銀輪曾照一漁村　銀輪　曽て照らせり　一漁村

神奈川県漢詩連盟　会長賞　宮山昌子

横濱中華街　横浜中華街
一日來遊臨港坊　一日来り遊ぶ　臨港の坊
廛頭館裏異邦香　廛頭館裏（てん）　異邦の香
獨斟綠酒望窓外　独り緑酒を斟んで窓外を望めば
船點紅燈晩若粧　船は紅灯を点じて晩に粧う若し

詩力と詩品の向上を目指して
「神奈川清韻」第一集・第二集

第一集　平成二十三年四月発行
第二集　平成二十六年四月発行

神漢連として合同の漢詩詩集を発刊することは創立の時からの夢として描かれていた。

「神奈川清韻」の命名は中山清先生によるものであるが、実際には中山先生からのゴーサインはなかなか発せられなかった。それは、出すからには全国の漢詩壇に於いて恥ずかしくない水準を示さなければならぬという先生の厳しい姿勢によるものであった。

この辺りのことを先生の「発刊に当って」の言葉より引用すると、「会員の皆様のご協力により会員数は発足当初の八十二名から今日（平成二十三年四月現在）百六十名に達せんとしていますが、会員の『詩力』はと考えると未だ忸怩たらざるをえません。その意味で今回の詩集に寄せられた八十八首の作品は、今後の向上発展の出発点として回顧されるものとなると思います。私は会員皆様の潜在能力をかんがえるとき瑕疵はあっても磨き甲斐のある玉であり、ただの石ではないと思っています」。

第一集の編集には、中山、岡崎、田原、城田、水城、三上、中島（龍）、三村、高津、川上、吉岡、桜庭の十二名が当たった。最終的には窪寺先生にご批正を戴く方向は決まっていたが、始めから全部をお願いするのではなく、編集委員会のなかでよく詩稿を推敲して、先生にはできるだけお手を煩わせないようにする方針も加味して、何回も会合を持ち議論を斗わせた。この様にして敲いた詩稿を窪寺先生に見て戴いた結果、先生が手を入れた個所は比較的少なかったようである。この検討作業での何よりの収穫は、編集委員が吾々でもやればある程度の事はできるという自信を持ったことである。

第二集の刊行

第一集の刊行より三年を経た平成二十五年の秋、中山先生が当初の目標とされた百首を収載すべく「神奈川清韻第二集」の刊行が企画され、編集責任には城田理事（当時）が当たった。

この時点で会員数は二百十名を越え、七期生までのサークルの結成が進展しており、会員からの詩の募集は各サークルを通じて行われた。結果として百三首の応募があり、目標とした百首を越えることができた。

岡崎満義会長の〝漢詩を親しみ易いものに〟という考えのもとに、詩稿のあとに作詩の動機や、詩の誕生した状況等について作者の解説を付けることにした。

詩集発刊における課題

会員からの寄稿詩稿とそれに対する批正ないし、編集委員会としての推敲の意見と作者本人の意思とのすり合わせ、換言すれば納得のいく推敲に如何にして落し込んでゆくかという課題である。これは、寄稿者と編集者の双方が、詩力と詩品の向上を目指して取り組むべき課題であることを指摘しておきたい。

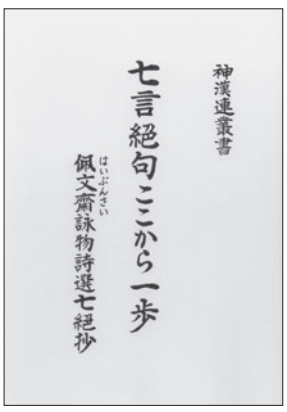
（桜庭慎吾 記）

他の県連からも注文殺到
神漢連叢書

「佩文齋詠物詩選」の中から城田六郎竹林舎友が七言絶句六百六十首を選び出し韻別に整理されたのを見て、これは会員の皆様方の詩作の役に立ちそうだから冊子にしようと有志の皆さんがPC入力、詠物別と韻別の索引も付けて平成二十七年一月に、「七言絶句ここから一歩―佩文齋詠物詩選七絶抄―」を刊行した。冊子の命名は岡崎満義会長、又、今後もこういう企画が続くようにと〝神漢連叢書〟第一号とした。

当初は神漢連会員の方々の詩作に役立てたいと編集・発刊したこの冊子であるが、全漢連の会報に紹介されたこともあって、北は東北から南は九州まで全国からの引き合いが多く、最初に印刷した二百冊に続き、増刷して、計四百三十冊を頒布した。ほぼ完売である。

最近は、他県連の方々から、〝この冊子を使って勉強会をしているが、これには市販の漢詩関連の本には掲載されていない詩が多いので苦労している。神奈川で講義（鑑賞会Cの事）をされていると聞いているがそのコピーをいただく事はできないか？〟といった問い合わせもある。全国の皆さん方がこの冊子を使って勉強会をされていることは神漢連としては誠に喜ばしい事である。その観点から、現在毎月実施している竹林舎友の先生方による「漢詩鑑賞会C―七絶一歩―」の講義の意義は非常に大きいと思われるので、この講義録を神漢連叢書第二号として刊行する予定である。



平成二十七年一月発行

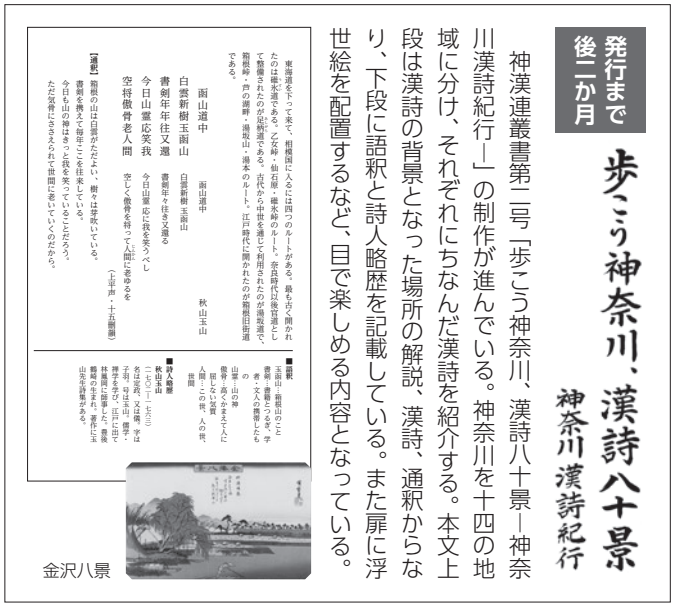
しかしながら、神漢連創立十周年記念行事の一環として企画・編集している「歩こう神奈川、漢詩八十景―神奈川漢詩紀行―」が先行して神漢連叢書第二号となりそうで、上記鑑賞会Cの講義録はそれに続く神漢連叢書第三、四、五号として刊行する事を予定している。

（三村公二 記）

発行まで後二か月

歩こう神奈川、漢詩八十景
神奈川漢詩紀行

神漢連叢書第二号「歩こう神奈川、漢詩八十景―神奈川漢詩紀行―」の制作が進んでいる。神奈川を十四の地域に分け、それぞれにちなんだ漢詩を紹介する。本文上段は漢詩の背景となった場所の解説、漢詩、通釈からなり、下段に語釈と詩人略歴を記載している。また扉に浮世絵を配置するなど、目で楽しめる内容となっている。



漢詩普及に向けた外部との連携と情報発信

新聞に漢詩を出したい
神奈川新聞連載「漢詩への誘い」が実現するまで

岡崎　満義

大正五年に夏目漱石が逝去したその翌年、朝日新聞紙上から漢詩欄が消え、その後全国の他の新聞からもいっせいに潮がひくように漢詩が姿を消したのである。以来百年間、その状態が続いている。それまでふつう日常生活の中で、当たり前に目に触れることができた漢詩は、新聞から忽然と消えたことによって、専門家か殊勝な趣味人だけに囲い込まれた特殊な愛玩物と化した。それでも大学の中国文学科では漢詩の講義は続いており、NHKラジオの石川忠久先生の漢詩講座のテキストは、最大二十万部の発行部数があったという。

漢詩愛好者はその程度いるとして、さて、漢詩実作者はどれぐらいいるのだろうか。平成十五(二〇〇三)年に全日本漢詩連盟が創立されたとき集まったのは千二百人、現在は千七百人。各種漢詩コンテストに集まる漢詩は四百首から最大千首である。

私の友人でオーストラリアのラトローブ大学で長年、社会学を教えた杉本良夫名誉教授は、「漢詩を作る人が千人近くいるというのは驚くべき文化現象だ。外国(中国)古典詩のルールをきちっと守ってふつうの庶民が漢詩を作るのを西欧にひきくらべてみれば、今ラテン語で押韻など規則を守って詩を作れるのは、特別な大学の先生か修道院の坊さんか、せいぜい十人いるかどうか。日本はすごい文化レベルだ」とほめてくれるのだが、とにかく明治・大正以来、低落傾向が続いているのをどこかで歯止めをかけたい。それにはまず新聞で漢詩を目にする機会を日常的に少しでもふやすことが必要だ、と思いコネクションを探した。

神奈川新聞広告部に昔仕事で知り合ったSさんがいることを思い出した。何度か足を運んで文化部長の西郷公子さんを紹介してもらった。西郷さんは「読者で漢詩が分かり、興味をもつ人がどれ位いますかねェ」とあまり乗り気でない。知名度のある大御所の石川忠久先生がよければ私が口説き落とすので、とにかく一年に何回かでも文化面に漢詩のスペースを作ってほしいと頼み込んだ。帰り際に平成二十二(二〇一〇)年に出版された私の著書『人と出会う』(岩波書店)を自己紹介がわりに西郷部長に渡した。

数日後、西郷部長から電話があって「あの本はとても面白かったので、岡崎さんがエッセイ風に漢詩を紹介するというやり方でよければ、第五日曜日に六百字程度のスペースを提供できる」とのこと。一も二もなくとびついた。年に四回でもとにかく新聞紙面に短歌・俳句・川柳などと一緒に漢

神奈川新聞　24年）4月29日　日曜日

全日本漢詩連盟は今から9年前に設立され、神奈川県漢詩連盟はその3年後にできた。「この英語万能時代に漢詩を作る人がまだいるの？」と思う人が多いだろう。漢詩の全国大会を開くと、少ないときで500首、多いときで1200首くらいの作品が集まる。どうやら漢詩実作者は日本の総人口の0・001%、まちがいなく〝絶滅危惧種〟だ。それでも私は、たとえ〝危惧種〟であっても、絶滅しなければいいと思い、わずかな時心と遊び心で、10年前から漢詩教室に通い、毎週1首を目標に四苦八苦しながら作っている。

漢詩を学ぶとまず「自然を風雅にうたうこと」と教えられるが、私は長年雑誌編集者をしてきたせいか、ついつい時事風俗人事の方に目が向いてしまう。上に掲げた詩はその一つ。7年も宇宙を迷走した後、小惑星イトカワのちりを持ち帰って日本はおろか、世界中を驚嘆させた」はやぶさ」を詠まずにはいられなかった。

それに〝戯訳〟をつけた。「宇宙ヲブラリ　ヒトリ旅／七年ヤット　里ゴコロ／イトカワノチリ　チヨト手ミヤゲニ／ウレシイ生還　佳キ名ハヤブサ」。われながらB級グルメ的漢詩だなあ、と思う。

実は私の愛読書・井伏鱒二「厄除け詩集」の真似である。「花発多風雨／人生足別離」(于武陵「勧酒」から)を「ハナニアラシノタトヘモアルソ／サヨナラダケガ人生ダ」とした名訳にあやかりたいとは思うものの、なかなかそうはいかない。あらゆる意味で前途遠いが、熱心な漢詩仲間とゆっくりのんびり詩作を続けている。

漢詩への誘い　1

岡崎　満義

「宇宙探査機隼帰還」

七載飛船無限程
七載(七年)飛船(宇宙探査機)無限の程(道のり)

晦冥宇宙苦長征
晦冥(暗黒)の宇宙　苦しき長征

喜聞拾得絲川坐
喜び聞く　拾い得たり糸川の坐(ちり)

勿忘帰来隼盛名
忘るる勿かれ　帰り来る隼の盛名

おかざき・みつよし　1936年鳥取県生まれ。京都大文学部卒。60年文芸春秋入社。「ナンバー」「文芸春秋」編集長など。99年退職。全日本漢詩連盟常務理事、神奈川県漢詩連盟会長。茅ケ崎市在住。

第5日曜日に掲載。次回は7月29日の予定です。

詩が載れば一つの橋頭堡になると思い、西郷部長の提案をありがたく頂戴した。ところがその直後に人事異動があり、新しく青木幸恵文化部長となった。ひょっとして前任の西郷部長との約束もお流れになるのではと心配したが、ちゃんと受けつがれて、平成二十四(二〇一二)年四月二十九日、「漢詩への誘い」の連載が始まった。

九月に三回目の原稿を渡したとき、青木部長から「この連載わりと評判がいいので、来年から第一日曜日の文化欄に移動してもいいですよ」との話。第一日曜日となれば毎月掲載(一月と十二月は年末年始の特別企画のための休載なので、実質年十回)ということになり、回数が倍増したのはありがたいことだった。その後、青木部長には吟行会にも参加してもらい、交流を深めることができた。地元のマスメディアとはいろいろな形で交流し、取材もしてもらいたい。今は文化部長も丸山孝さんに替わったが、これまで通り連載を続けてもらっている。

「漢詩への誘い」がどれほど漢詩の〝広告塔〟の役割を果たしているかわからないが、これが一つの見本となって、全国三十余の地区連盟がそれぞれの地元紙に働きかけて、漢詩コーナーを新設してもらえないかと考えたりする。

横のつながりをふやそう
外部との連携と情報発信

各活動記事において既に触れられているが、これらをまとめると以下の通りである。

◇外部との連携

①詩吟団体…岳精流日本吟院(宗家・横山精真氏)との連携で、「岳精会漢詩研究会」が平成二十五年に発足し、また「岳精会千代田漢詩会(仮称)」の初心者講座が平成二十八年二月に開講した。「湘清会」(三上光敏氏主宰)では、岡崎満義会長が年一回講演を行っている。

②書道団体…「日本書道学院」(院長・石川省吾氏)では、自作の漢詩を積極的に書に認めている。また、上田尤子さんは自詠自書の展示会を平成二十七年に行い、本年十月にも予定している。

③カルチャーセンター…古田光子さんは朝日カルチャーセンター湘南で、水城まゆみさんは新百合ヶ丘産経学園で、それぞれ「初心者入門講座」の講師を務めている。

◇外部への情報発信

①インターネット…神漢連のHPを平成二十四年四月に開設し、さらに漢詩鑑賞会AのHPでは講義内容を公開している。

②出版…「神漢連叢書」参照。(三村公二記)

その他

「竹林の七賢」をイメージして
竹林舎

鑑賞会A、Bの開催に相前後して、平成二十六年十月の執行理事会で、詩力の高いベテラン会員の皆様からなる「竹林舎」の設立を決定し、執行部隊への助言と後輩の指導等をお願いする事となった。舎友は当初の七人に固定することなく、執行理事会の推薦があれば誰でも何時でも参加していただける事になっている。

最長老の酒井謙太郎さんは残念ながら昨年お亡くなりになり、一方一名が追加となったので、現在の舎友は左記の七人の方々である。

(三村公二記)

写真左上から　(敬称略)
玉井幸久、飯沼一之
城田六郎、古田光子
住田笛雄、桜庭慎吾
故秋吉邦雄
(平成28年7月ご逝去)

資料編

■全日本漢詩大会／扶桑風韻漢詩大会／国民文化祭／プレ漢詩大会
神奈川県漢詩連盟会員入賞・入選者一覧

開催年	大会	開催場所	号数	神奈川県漢詩連盟会員入賞・入選者名 特別賞	入賞(秀作)	入賞(佳作)	入選	連盟設立
平成一五	プレ漢詩	福岡(大宰府)		古田光子			山口克巳*	全日本
	扶桑風韻漢詩	東京	一号					島根
平成一六	国民文化祭	福岡(大宰府)		中山　清	江水武夫*	小林榮一 中野国武 安井敬止* 林久二於* 古田光子 山口克巳*		茨城
	扶桑風韻漢詩	東京	二号			小松美博* 田原健一		
平成一七	国民文化祭	福井(福井)		古田光子			中山　清 安井敬止* 土橋玉枝*	千葉 東京
	扶桑風韻漢詩	東京	三号			古田光子	小林榮一	
平成一八	全日本漢詩	愛媛(松山)	四号		古田光子	水城まゆみ	坂上貞夫	**神奈川**
平成一九	プレ漢詩	茨城(水戸)		田原健一	古田光子		三村公二 小林榮一	埼玉 岡山
	扶桑風韻漢詩	東京	五号	田原健一		小林榮一 小松美博* 水城まゆみ	古田光子 三村公二	
平成二〇	国民文化祭	茨城(水戸)		石川省吾 古田光子 酒井謙太郎 中山　清	水城まゆみ 金尾トミ子*		三村公二 瀧川智志 住田笛雄 小林榮一	栃木

特別賞漢詩一覧

◇平成十五年度

プレ漢詩大会　福岡県知事賞　古田光子

客舎逢春　　客舎にて春に逢ふ

雨霽梅開暖意加　　雨霽れ梅開きて　暖意加はる
江南客舎鳥聲譁　　江南の客舎　鳥声譁(かまびす)し
遙憐故苑老槐樹　　遙かに憐れむ　故苑の老槐樹
尚向寒天帶雪花　　尚寒天に向かひて　雪花を帯ぶるを

◇平成十六年度

国民文化祭
太宰府市実行委員会会長賞　中山　清

蟹　　蟹

張目裝鏨如勁兵　　張目装鏨(ぼう)　勁(けい)兵の如し
鋏刀八脚只横行　　鋏(きょう)刀八脚　只横行す
長卿解否歐蘭字　　長卿解するや否や　欧蘭の字
口角飛泡不作聲　　口角泡を飛ばして　声を作さず

◇平成十七年度

国民文化祭　三国町長賞　古田光子

病中偶作　　病中偶作

茅舍秋深人語稀　　茅舍秋深くして　人語稀なり

平成二〇	扶桑風韻漢詩	東京　六号		酒井謙太郎 古田光子	小松美博*	水城まゆみ 小林榮一 大谷明史
平成二一	全日本漢詩	東京　七号		石川省吾 小林榮一 三村公二	酒井謙太郎 水城まゆみ	高津有二
平成二二	国民文化祭	岡山(浅口)	城田六郎 古田光子	生駒祐子 住田笛雄		成瀬萌美* 瀧川智志 石川省吾
	扶桑風韻漢詩	東京　八号	古田光子		中島龍一	萬谷美次
平成二三	全日本漢詩	栃木(足利) 九号	石川省吾			小山典子 久川憲四郎
平成二四	全日本漢詩	東京　十号	石川省吾 中島龍一	城田六郎	古田光子	小嶋明紀子 小林榮一 萬谷美次
平成二五	国民文化祭	山梨(韮崎)	上田尤子	石井彦徳 石川省吾 瀧川智志	成瀬萌実*	飯沼一之 桜庭慎吾 住田笛雄 高津有二 中島龍一 古田光子 室橋幸子
	扶桑風韻漢詩	東京　十一号		中島龍一 大谷明史 川上修己	小嶋明紀子 水城まゆみ	久川憲四郎 城田六郎
平成二六	全日本漢詩	宮城(仙台) 十二号	上野裕一* 中島龍一 高津有二 飯沼一之 岡田泰男			水城まゆみ
平成二七	全日本漢詩	福岡(大宰府) 十三号	城田六郎 中島龍一		瀧川智志	香取和之 水城まゆみ
平成二八	全日本漢詩	京都(京都)				熊本 三重 ネット

					新潟	
			山梨 長野	宮城 近畿	大分 佐賀 沖縄	石川 長崎

(注)氏名の後の*は神奈川県在住で、神奈川県漢詩連盟会員外を示す。

病牀老叟更衰微　病牀の老叟　更に衰微す
黄昏鬱鬱倚窓望　黄昏鬱々として　窓に倚りて望めば
衆鳥相呼自在飛　衆鳥相呼びて　自在に飛ぶ

◇平成十九年度

プレ漢詩大会
茨城県教育委員会教育長賞　田原健一

木筆

老懐時夢故山邊　老懐時に夢む　故山の辺
深谷幽林白萼鮮　深谷幽林　白萼(がく)鮮やかなり
欲寫嵐光玄妙筆　写さんと欲す嵐光　玄妙の筆
筆尖風起畫蒼天　筆尖風起きて　蒼天を画く

扶桑風韻漢詩大会　優秀作品賞　田原健一

曉湖

山脚風吹曉霧消　山脚風吹いて　曉霧消え
湖心時望小舟漂　湖心時に望む　小舟の漂うを
半孤放散打魚網　半孤放散　打魚の網
捕得日輪波上跳　捕え得たり日輪　波上に跳る

◇平成二十年度

国民文化祭　実行委員会会長賞　石川省吾

偕樂園曉鐘樓　偕楽園曉鐘楼

好文雪魄耐寒發　好文の雪魄　寒に耐えて発き
吐玉奔泉洗耳縈　吐玉の奔泉　耳を洗って縈(めぐ)る
紅頰嘗回名苑徑　紅頰嘗て回る　名苑の径
白頭尚聽曉鐘聲　白頭尚聴く　暁鐘の声

国民文化祭
茨城県実行委員会会長賞　古田光子

過舊居　旧居に過る

鳥雀噪庭紫戸壞　鳥雀庭に噪ぎて　紫戸壞れ
蔦蘿纏牖舊居荒　蔦蘿牖に纏りて　旧居荒れたり
唯看先妣手栽菊　唯看る先妣　手ずから栽うる菊
籬畔寥寥對夕陽　籬畔寥々　夕陽に対するを

国民文化祭
全日本漢詩連盟会長賞　酒井謙太郎

櫻花頌　桜花頌

誰敎山野發香葩　誰か山野をして　香葩を発かしむ
郭北郭南花又花　郭北郭南　花又花
三月旬餘抛世累　三月旬余世累を抛ち
田夫吾亦醉流霞　田夫吾も亦　流霞に酔わん

国民文化祭
茨城県漢詩連盟会長賞　中山　清

燈臺　灯台

屹立灣頭對水天　湾頭に屹立して　水天に対す
寒風烈日固恬然　寒風烈日　固より恬然
明光百里照長夜　明光百里　長夜を照らし
不動不言行萬船　不動不言　万船を行る

◇平成二十二年度

国民文化祭　浅口市長賞　城田六郎

讀菅家後集　菅家後集を読む

謫落柴荆不出門　謫落柴荆　門を出でず
帝鄉遙拜倚頽軒　帝鄉遥かに拝し　頽軒に倚る
無由雪罪奈幽憤　罪を雪ぐに由無し　幽憤を奈せん
想得賜衣留涙痕　想ひ得たり賜衣　涙痕を留むるを

国民文化祭
浅口市教育委員会教育長賞　古田光子

代悲索居老嫗　索居を悲しむ老嫗に代る
獨守家居待子回　独り家居を守りて　子の回るを待ち
庭花愛育久堪哀　庭花愛育して　久しく哀に堪ふ
薔薇馥郁無人到　薔薇馥郁として　人の到る無し
唯看遊蜂求蜜來　唯看る遊蜂の　蜜を求て来るを

扶桑風韻漢詩大会　優秀作品賞　古田光子

臘梅　臘梅

馥郁東風到几邊　馥郁たる東風　几辺に到る
始知牆角臘梅妍　始めて知る　牆角臘梅の妍なるを
慈萱晚歲自栽樹　慈萱晩歳　自ら栽うる樹
一朶插瓶靈位前　一朶瓶に挿す　霊位の前

◇平成二十三年度

全日本漢詩大会
わたらせテレビ賞　石川省吾

尋廬山遇雨　廬山を尋ねて雨に遇う

一條花徑樂天臥　一条の花径　楽天臥し
千丈飛流太白吟　千丈の飛流　太白吟ず
腦裏詩章空口誦　脳裏の詩章　空しく口誦

凝眸祕境雨雲深　眸を凝らす秘境　雨雲深し

◇平成二十四年度

全日本漢詩大会
文部科学大臣賞　石川省吾

黄山初陽　黄山初陽

拂曉冒寒孤倚筇　払暁寒を冒して　孤り筇に倚る
東天漸白泛奇峯　東天漸く白んで　奇峯泛かぶ
忽穿雲海一條箭　忽ち雲海を穿つ　一條の箭
先射山巔蟠屈松　先ず射る山巔　蟠屈の松

全日本漢詩大会
斯文会理事長賞　中島龍一

秋日漫興　秋日漫興

天青雲白恣閑游　天青く雲白く　閑游を恣いままにす
野寺門庭丹柿稠　野寺の門庭　丹柿稠し
欲盜村童伺回首　盗まんと欲する村童　伺いて回首すれば
路隅石佛閉雙眸　路隅の石仏　双眸を閉ず

◇平成二十五年度

国民文化祭
韮崎市実行委員会会長賞　上田尤子

箱根晩秋　箱根の晩秋

錦楓樹下梵宮前　錦楓の樹下　梵宮の前
殷殷鐘聲函嶺傳　殷々たる鐘声　函嶺に伝う
無頼西風紅葉盡　無頼の西風に　紅葉尽き
使人最愴晩秋天　人をして最も愴ましむるは晩秋の天

◇平成二十六年度

全日本漢詩大会
宮城県教育委員会教育長賞　中島龍一

旅宿朝　　旅宿の朝
凄凄斜月對疎林　凄々たる斜月　疎林に対し
枕上鷄聲破曉陰　枕上の鶏声　暁陰を破る
料得溪流夜來凍　料り得たり渓流　夜来凍る
今朝不聽水車音　今朝聴かず　水車の音

全日本漢詩大会　河北新報社賞　高津有二

一本松　　一本松
瑤林瓊樹絶無蹤　瑤林瓊樹　絶えて蹤無くも
滄海沙汀昔日容　滄海沙汀　昔日の容
晩浦漁舟維纜處　晩浦漁舟　纜を維ぐ処
長投夕影凛孤松　長く夕影を投じ　孤松凛たり

全日本漢詩大会　東北放送賞　飯沼一之

福島縣廣野町産米　福島県広野町産米
憑聖旨見搬皇居　聖旨によって皇居に搬ばる
災餘三歳活田園　災余三歳　田園活り
新米一苞臻禁門　新米一苞　禁門に臻る
炊爨飯香和御膳　炊爨の飯香　御膳和らぎ
龍顔莞爾午窓溫　竜顔莞爾　午窓温かなり

全日本漢詩大会
宮城県漢詩連盟会長賞　岡田泰男

不爲雨讀　　雨読と為らず
酣眠不許惡鷄鳴　酣眠許さず　鶏鳴を悪み
困憊田翁顰一聲　困憊の田翁　一声に顰む
已矣消亡夜來雨　已矣　消亡す夜来の雨
曙光照鑊促春耕　曙光　鑊を照らして春耕を促す

◇平成二十七年度

全日本漢詩大会　福岡県知事賞　城田六郎

憂空家八百萬戸　空家八百万戸を憂う
故山鰥寡守家居　故山の鰥寡　家居を守るも
後繼兒孫定有無　後継の児孫定めて有りや無しや
環堵團欒近來少　環堵の団欒　近来少なり
東西南北國將蕪　東西南北　国将に蕪れなんとす

全日本漢詩大会　テレビ西日本賞　中島龍一

農村卽事　　農村即事
春社鼓簫鄉里天　春社の鼓簫　郷里の天
誰家檐下暖暄邊　誰が家か檐下　暖暄の辺
頑童傍母剃頭處　頑童母に傍いて　剃頭の処
惟有餛飩端膝前　惟有り餛飩　端膝の前

■全国ふるさと漢詩コンテスト(多久市)
神奈川県漢詩連盟会員入賞・入選者一覧

開催年	回	優秀賞(詩題)	入選
平成一一	第二回		中山　清
平成一五	第六回	玉井幸久『山村春色』	
平成一六	第七回	古田光子『消夏』	玉井幸久
平成一七	第八回	玉井幸久『月夜』、古田光子『倶利伽羅峠』	
平成一八	第九回	水城まゆみ『横濱港舟遊』	
平成一九	第一〇回	城田六郎『對馬淺茅灣』	古田光子
平成二〇	第一一回	中山　清『過閑谷學』、城田六郎『身延道中』	
平成二一	第一二回	城田六郎『田園晩秋』	古田光子
平成二二	第一三回		古田光子
平成二三	第一四回	古田光子*『湯島聖堂』	
平成二四	第一五回		古田光子
平成二五	第一六回		城田六郎、住田笛雄、高津有二
平成二六	第一七回	古田光子『丘上看雲』	小嶋明紀子
平成二七	第一八回	池上一利*『摩周湖』	川上修己、瀧川智志

(注)氏名の後の＊は最優秀賞を示す。

■神奈川県漢詩連盟　運営面の歩み

和歴 西暦	総会開催月日 開催場所	会員数 (出席数)	◎会長 ○副会長 ●事務局長	顧問 監事※	理事	執行理事	運営委員	演題／講演者	特記事項
平成一八 二〇〇六	一〇月一四日 技能文化館	七九名 (六〇)	◎中山　清 ○岡崎満義 ●田原健一	石川忠久 窪寺　啓 浅岡清明 住田笛雄※	石川省吾 玉井幸久 福原豊弘 古田光子	中山　清 岡崎満義 礒野衛孝 桜庭慎吾 水城まゆみ 田原健一		「神奈川の漢詩」 石川忠久先生	・神奈川県漢詩連盟発足
平成一九 二〇〇七	六月　八日 近代文学館	一〇四名 (四〇)						「現代日本人の漢詩」 窪寺貫道先生	・初心者入門講座開講 ・漢詩サークル第一期(金星会)発足
平成二〇 二〇〇八	六月一七日 近代文学館	一二二名 (五三)	全員留任	全員留任	全員留任	全員留任		「神奈川の漢詩・続」 石川忠久先生	・第一回研修会(一月二四日) ・第一回吟行会(四月三〇日)
平成二一 二〇〇九	五月二一日 近代文学館	一四〇名 (六三)						「横浜に縁りの詩」 石川忠久先生	・横浜開港一五〇周年記念漢詩大会
平成二二 二〇一〇	五月一四日 近代文学館	一六〇名 (六四)	全員留任	全員留任	全員留任	全員留任		「花を詠う詩」 石川忠久先生	・第一回サークル交流会(一二月一日)
平成二三 二〇一一	五月一八日 近代文学館	一六一名 (七八)	◎中山　清 ●田原健一 (一〇月迄) 以降 ◎岡崎満義 ●桜庭慎吾			中山　清 岡崎満義 田原健一 桜庭慎吾 水城まゆみ 城田六郎 三上光敏(一)	川上修己(四) 高津有二(三) 中島龍一(二) 三村公二(一) 吉岡昭夫(二) 室橋幸子	「自然を詠う詩」 石川忠久先生	・『神奈川清韻』(第一集)発刊(四月) ・中山清会長逝去(一二月四日)
平成二四 二〇一二	五月二二日 近代文学館	一九二名 (一〇〇)	◎岡崎満義 ○田原健一 ○水城まゆみ ●桜庭慎吾	全員留任	石川省吾 玉井幸久 古田光子 福原豊弘 岡田泰男 磯野衛孝	岡崎満義 田原健一 桜庭慎吾 水城まゆみ 城田六郎 三上光敏(一)	全員留任	「杜甫の詩を味わう」 石川忠久先生	・神奈川県漢詩連盟ホームページ立ち上げ(四月一日) ・神奈川新聞「漢詩への誘い」掲載開始(四月二九日) ・寄贈本頒布会

平成二五 二〇一三	五月二二日 近代文学館	一九六名 （七〇）	全員留任	全員留任	石川省吾 玉井幸久 古田光子 岡田泰男 磯野衛孝	「漱石に見る漢字文化の受容」 石川忠久先生
平成二六 二〇一四	五月二一日 近代文学館	二一三名 （八四）	◎留任 ○留任 ●桜庭慎吾（一〇月迄） 以降 ●三村公二（一）	石川忠久 窪寺　啓 浅岡清明 城田六郎 住田笛雄※	石川省吾 玉井幸久 古田光子 岡田泰男 横山真吾	飯島敏雄（五） 川上修己（四） 中島龍一（二） 室橋幸子 吉岡昭夫（二） 高津有二（三） 三村公二（一） 他は留任	飯島敏雄（五） 他は留任	「近代文人の漢詩」 石川忠久先生
平成二七 二〇一五	五月二〇日 近代文学館	二三八名 （七四）	全員留任	全員留任	全員留任	全員留任	池上一利（四） 礒邊邦雄（岳） 喜多　基（七） 瀧川智志（三） 柴田　洋（六）	中島義和（八） 家吉幸二（九） 他は留任
								「江戸後期の詩人たち」 石川忠久先生
							・漢詩鑑賞会A、B発足 ・『神奈川清韻』（第二集）発刊（四月） ・霧笛女子会発足	・「佩文齋詠物詩選七絶抄」発刊 ・漢詩鑑賞会C発足 ・寄贈本頒布会（第二回）

（注）平成二三年、運営委員制度新設。会員数は年度末の数値である。氏名の後の括弧内の数字は、何期生かを表す。尚、岳は岳精会を示す。

■神奈川県漢詩連盟　会員数の推移

年度	会員数	前年度比増減	入門講座受講者数
平成一八	七九名		（未開催）
平成一九	一〇四名	二五名	二二名
平成二〇	一二二名	一八名	二七名
平成二一	一四〇名	一八名	二一名
平成二二	一六〇名	二〇名	二五名
平成二三	一六一名	一名	三八名
平成二四	一九二名	三一名	三九名（岳精会二五名含）
平成二五	一九六名	四名	二三名
平成二六	二一三名	一七名	三六名
平成二七	二三八名	二五名	四八名
累計（平成一八～二七）			二七九名

数字は全て総会（二七年度は理事会）報告資料による。
＊会員数は各年度末（＝次年度期首）の人数。

寄贈本頒布会

第四回総会記念写真

□神奈川県漢詩連盟規約

（名称）
第一条　本会は、神奈川県漢詩連盟と称する。
（目的）
第二条　本会は、神奈川県における漢詩の研究、普及並びに交流を目的とする。
（会員及び会費）
第三条　本会は、本会の目的に賛同する者をもって会員とする。
一　会員は一般会員、賛助会員及び法人会員の三種類とし、各々入会手続きをとり三項の会費を納めた個人及び法人を、会員とする。
二　会費は、一般会員は年二〇〇〇円、賛助会員は一口一〇〇〇〇円、法人会員は一口五〇〇〇〇円とする。
三　入退会手続き
①入会は所定の申込書に必要事項を記載して事務局宛申し込む。
②退会は口頭または書面（書式自由）で事務局宛申し出る。
③年会費が三年以上未納の場合は自然退会とする。
（事業）
第四条　本会は、その目的を達成する為、次の事業を行う。
（1）講演会、研修会。
（2）機関紙の発行などによる漢詩詩作の研鑽、発表。
（3）会員相互の交流。
（4）その他当連盟にふさわしい事業。
（役員）
第五条　本会を運営する為、次の役員を置く。
会長　一名
副会長　若干名
理事（執行理事を含む）　若干名
運営委員　若干名
事務局長　一名
監事　一名
二　その他必要に応じ、会長の委嘱により顧問及び相談役を置くことができる。
（役員の選任）
第六条　役員の選任は、次のとおりとする。
（1）会長は、理事会で理事の互選により推薦を受け、総会で承認する。
（2）理事は、会長が推薦し、理事会の承認を経て、総会で承認する。
（3）副会長は、理事の中から会長が指名する。
（4）執行理事は、会長が理事の中から指名し、総会で選任する。
（5）運営委員は、会長が推薦し、理事会の承認を経て、総会で承認する。
（6）監事は、理事会の承認を経て会長が推薦し、総会で選任する。
（7）事務局長は、会長が委嘱し、総会で承認する。
（役員の任務）
第七条　役員の任務は、次のとおりとする。
（1）会長は会を代表し、会務を統括する。
（2）副会長は、会長を補佐し、会長に事故ある時は、会長の職務を代行する。
副会長が複数の場合は、あらかじめ理事会において定めた順位に従って会長代行に就く。
（3）理事は、理事会を構成し、予算及び決算等総会に諮る事項を審議する。
（4）執行理事は、正副会長と共に執行理事会を構成し、会務を運営執行する。
（5）運営委員は、執行理事会に出席して審議に参加し、会務を運営執行する。
（6）事務局長は、会長の指示を受け、会の事務を統括、推進する。
（7）事務局長のもとに次の実行グループを置き、分担して会の運営を行う。
①総務・企画グループ　②教育グループ
③事業グループ　④会報グループ
⑤ホームページグループ　⑥経理グループ
（8）監事は、会計を監査する。
（役員の任期）
第八条　役員の任期は二年とし、再任を妨げない。
また、欠員補充として選任された役員の任期は、前任者の残余期間とする。
（総会、理事会及び執行理事会）
第九条　総会は、年一回会長が招集し、理事、運営委員、監事の選任、事業計画、予算、決算の承認を行う。
二　理事会は、必要に応じて会長が招集し、主として総会に提案する議案を立案する。
三　執行理事会
①執行理事会は、定例としては月一回開催し、総会で承認された事業計画を具体化し、実行計画を策定する。
②総会で承認された事業等に関連の深い事業の実施、或いは現状に即した内容の変更は、特に理事会に諮らなくても執行理事会の議決に従って執行出来るものとする。
③但し、次のような重要案件は、必ず理事会での承認を必要とする。
・人事変更　・規約改定
・一〇万円以上／一件の新規事業
・年度会費の改定
・その他、連盟運営の根幹に関わる事項
四　総会、理事会及び執行理事会の議長は、会長が務める。
五　各議会で議決が必要の場合は、各々出席者の過半数の賛成により決する。
（会計年度）
第一〇条　本会の会計年度は、四月一日から翌年三月三一日までとする。
二　本会の運営費用に充てる為、寄付金の申し出がある場合は、これを受ける。
三　会の運営上、行事費用が必要な場合には、その都度これを徴収する。
（事務局）
第一一条　本会の事務局は、事務局長の自宅に置く。
（その他）
第一二条　この規約に定めない事項については、理事会において協議して定める。

補則
（竹林舎の設置）
漢詩に関する造詣が深いシニア会員が、会員の詩力向上及び連盟の諸活動をサポートするため、「竹林舎」を設置し、構成員は「竹林舎友」と称する。
二　入舎資格は次の通りとする。
①漢詩に関する造詣が深く、かつ詩力が高いシニア会員
②連盟の諸活動に対して日常的なサポートが可能な会員
③理事三名が推薦し執行理事会が承認した会員

付則
一　この規約は、平成一八年一〇月一四日から施行する。
二　第六条の定めにかかわらず、設立第一期の会長は発足人会で選出する。
三　規約改定　平成二四年五月二二日（運営委員の設置、他）
四　規約改定　平成二七年五月二〇日（理事会・執行理事会の役割明確化、竹林舎の設置に関する補則新設）

□神奈川県漢詩連盟会員一覧

発足時（平成十八年十月十四日）　七八名

相原　一輝
浅岡　清明
飯沼　一之
石井　彦徳
石川　省吾
石川　忠久
石川　豊
石田　和子
礒野　衛孝
市川　泰
岩崎　徳康
内村　才五
宇都宮義久
梅本　光男
大井川満利
大藤　宏
大本　久
岡崎　満義
岡田　泰男
重谷　蔦
川口美智子
國田　公義
窪寺　啓
小館　裕彦
小林　榮一
近藤喜一郎
酒井謙太郎
坂上　貞夫
坂本　矗
桜庭　慎吾
佐々木正人
佐藤　敏彦
城田　六郎
住田　笛雄
仙場　幸男
高瀬　享徳
高瀬美佐子
田原　健一
玉井　幸久
塚本　周吉
圓谷　照男
豊田小夜子
中須　洋二
中田　英則
中野　國武
中山　清
中山　重臣
永野　澄
名和　道男
根津　伶子
乗竹　恒男
長谷川胤彦
花田　公行
春山　右濤
福原　豊弘
藤野破摩雄
古田　光子
堀田　泰生
松田　滋
松山　正明
三崎　肇
水城まゆみ
三谷富美子
三谷　昌子
三橋　保三
宮路　榮輔
宮山　昌子
室橋　幸子
本宮　陽子
森　重光
山内　大五
山崎　勝枝
山田　文央
山本　佐知
山本　博一
横山　真吾
渡辺　恵
渡辺　美宏

現在（平成二十八年六月末現在）　三〇三名

相原　一輝
青木　周二
青木　美憲
赤池　双美
赤池　芳明
赤間　嘉幸
秋吉　邦雄
浅岡　清明
安部　元生
新井　直行
新井　治仁
新井　陸郎
荒木　栄子
安藤　啓子
飯島　敏雄
飯島　春枝
飯田　邦雄
飯沼　一之
池上　一利
池田　清二
生駒　祐子
石井　彦徳
石川　省吾
石川　忠久
石川　雅則
石川　昌良
石倉　睦美
石田　健司
石田　延江
石松　和善
石母田敏江
出水田好徳
磯田　貞二
礒野　衛孝
礒邉　邦雄
板本　健作
伊東　健
伊藤　光子
犬飼　勇雄
犬飼　堯
今泉　由利
今藤　洋海
妹脊真理子
岩波　弘道
岩橋　伸泰
岩村　順一
上田　眞也
上田　尤子
植松　勲
牛山　知彦
内村　才五
内山　義浩
宇津井　寛
宇野　次郎
梅村　郁郎
大迫　恵弘
大沢　洵子
大谷　明史
大塚　禮子
大原真理子
大村　雅彦
大森　冽子
大森　正泰
大山　賢一
岡崎　勝郎
岡崎　満義
岡嶋　宣昭
岡田　泰男
尾崎　明子
小田　勝明
影山亥史郎
笠　泰幸
春日　忠衛
加瀬　勝子
片岡　義雄
加藤　隆司
加藤　博義
角田真理子
門山　榮作
香取　和之
金井　俊夫
金子　隼人
加納　隆
鎌田　隆男
唐戸　輝哉
蒐場　直一
川上　修己
川口美智子
川久保幹男
川本　健一
神田　英昭
菊池　利廣
喜多　基
北村　友雄
木戸　彪
木下　正次
木村　陽兒
木村英太郎
京谷　隆男
工藤　一也
國田　公義
窪田　都香
窪寺　啓
黒原　徳子
小泉　計治
康　樹偉
小梶　清司
小越　一照
小嶋明紀子
小菅　幸枝
後藤　一敏
小林　榮一
古林源次郎
小林　秀俊
小林　幹雄
小林　迪雄
小村由美子
小松　進
小山洋三郎
小山　和代
小山　典子
権藤　紘一
齊藤　興二
齋藤　護
酒井　三郎
坂上　貞夫
坂爪寿恵広
坂本　矗
櫻田　謙進
桜庭　慎吾
佐々木正人
佐藤　恵子
佐藤　誠一
佐藤　敏彦
佐藤　裕明
佐藤　正敏
沢田　愛子
芝　公男
柴田　豊彦
柴田　洋
柴本　信子
嶋内　隆行
清水　純子
志村　典子
下条　信行
下村佐智子
城田　六郎
菅野　省三
杉浦　弘道
杉森千枝美
鈴木　栄次
鈴木　諭
鈴木　重成
鈴木　正敏
住田　笛雄
関　喜一
高田　宗治
高津　有二
高松　英郎
田川　行雄
瀧川　智志
滝野　初江
竹内　巌
武田　一郎
武田　利廣
竹森　二郎
辰巳　佳樹
立松　道子
田中　成器
田中　誠
谷川　勝利
谷下　喬一
田原　健一
玉井　幸久
田村左千子
丹下　和幸
近添　智子
張　穎
蔦　清昭
土屋　昇三
圓谷　照男
登丸　昌子
富沢　正永
豊田小夜子
内藤　悦子
永井　朝子
長岡　巨知
中島　裕子
中島美和子
中島　義和
中島　義文
中島　龍一
中田　英則
中津川伸一
永野　澄
中野　國武
中野　幸子
中野雅利男
中野　三琴
中村　泰
中山　洋子
名取　満雄
名和　道男
南上清一郎
仁上　恵子
西津貴美子
西津　秀昭
根石紀恵子
埴原かをり
羽佐間典子
橋本　孝一
長谷場純一
八田　豊
服部　幸子
濱岡日出夫
花田　公行
浜辺　又八
原田　睦夫
久川　愛子
久川憲四郎
檜山　太作
平井　茂行
平賀　康雄
廣田　イミ
福井スミ子
藤野破摩雄
藤間　剛
藤本　恭子
古川　彌
古田　光子
古屋リクコ
細江　利昭
堀内　和
本田　一
本間　久幸
前嶋　彩江
増井百合子
松井　秀人
松尾　守之
松岡　康夫
松田　敦子
松原　裕子
松本　征儀
松本　肇
松本　祐輔
松山　正明
萬谷　美次
三宅眞理子
三浦　昭二
三浦　哲郎
三上　光敏
水城まゆみ
溝口　雄三
三谷富美子
三橋　稟也
三並　哲治
三村　公二
宮本　重博
宮山　昌子
村上　良明
村田　瑛子
村田　忠和
室橋　幸子
望月　輝夫
本宮　陽子
森川誠一郎
森坂　雄三
森田準之助
森本　隆泰
森谷　正彦
諸星　暢義
薬師寺保之
保田　昌男
安田　博
柳原　庸子
山岡　健郎
山縣　知彦
山口　和
山口　隆久
山口　幸雄
山野　巧
山本　喬
湯浅　和美
湯山徳次郎
湯山　典重
横溝喜久男
横溝比呂美
横山　真吾
吉池　啓子
吉岡　昭夫
吉澤　正浩
吉田　種弘
吉田　節子
吉野　孝子
吉羽　忠彦
若生　公俊
若林　允
若森　京子
脇坂　守
渡部　淳子
渡辺厳太郎
和田　博之

（敬称略）

平成二十八年～二十九年開催予定

神奈川漢詩連盟創立十周年記念行事

今年の十月十四日に神漢連は創立十周年を迎える。神奈川方式と石川先生から再々にわたりお褒めの言葉を頂いたこの十年の歩みは、偏に諸先輩方のお力によるものである。この十年間は連盟の基礎固めの時期であったと認識しているが、本年はこの十年の実績をバネにして更なる発展に向けての節目の年になるであろう。従って、これからの活動は神漢連の基礎を更に強固なものにしていく努力と同時に、「漢詩を学ぶ、漢詩で遊ぶ」をモットーに諸活動が連盟内に閉じこもることなく、広く外部に働きかけ、漢詩の裾野を広げていくことに注力していく予定である。

十周年記念行事はその新しいスタートの一里塚であるという認識から、五十代、六十代の若手会員から成る企画委員会を立ち上げ、いろいろな行事の企画をして頂いた。その結果、次の二つの行事を柱に実施する事になった。

一　**十周年記念式典**

○二十八年度総会を兼ねて十月十九日(水)に近代文学館にて実施

二　**漢詩大会と漢詩フェスティバル**

○二十九年三月十六日(木)～十七日(金)に横浜開港記念館にて実施

○漢詩大会は十七日(金)、中華街とのコラボをベースに詩題は「横濱中華街」、「中華料理」、その他神奈川県に関する詩、自由題も可とする。漢詩募集は神漢連会員及び全国の漢詩連盟会員、その他。

○後援は神奈川県、横浜市教育委員会、川崎市、一般社団法人日中協会、横浜華僑総会、横浜中華街発展会協同組合、神奈川新聞社、産経新聞社横浜総局、日本経済新聞社横浜支局、読売新聞社横浜支局、tvk(テレビ神奈川)、全日本漢詩連盟

○フェスティバルは二日間にわたって開催、左記のような催しを計画中

・自詠自書展

・神奈川漢詩紀行の書の展示

・中華料理漢詩のパネル展示

・誰にでもできる漢詩指導等

これらを盛り上げる為に次の冊子の発刊を予定している。

○〝漢詩を学ぶ・漢詩で遊ぶ〟

神奈川県漢詩連盟十年の歩み

○〝歩こう神奈川、漢詩八〇景〟

神奈川漢詩紀行

又、漢詩グッズとして、

○漢詩(静夜思を予定)を染色したトートバッグの制作・頒布を計画中（三村公二記）

□十周年記念行事協賛金寄金者氏名一覧

三並　哲治　　礒野　衛孝　　櫻庭　慎吾　　秋吉　邦雄
諸星　暢義　　佐々木正人　　武田　一郎　　鈴木　正敏
三浦　昭二　　名取　満雄　　大谷　明史　　柴田　洋
小菅　幸枝　　青木　周二　　杉森千枝美　　板本　健作
石川　省吾　　川上　修己　　小越　一照　　坂上　貞夫
長岡　巨知　　中島　龍一　　中島　義和　　藤野破摩雄
小林　秀俊　　松原　裕子　　荒木　栄子　　佐藤　裕明
森本　隆泰　　三村　公二　　柴本　信子　　南上清一郎
室橋　幸子　　山口　幸雄　　田原　健一　　牛山　知彦
菅野　省三　　本宮　陽子　　古田　光子　　保田　昌男
斎藤　興二　　芝　公男　　嶋内　隆行　　梅村　郁郎
岡嶋　宣昭　　斎藤　護　　横溝喜久男　　上田　尤子
古川　彌　　鈴木　榮次　　横溝比呂美　　唐戸　輝哉
萬谷　美次　　村田　忠治　　磯邉　邦雄　　武田　利廣
久川憲四郎　　今藤　洋海　　岡田　泰男　　村上　良明
久川　愛子　　仁上　恵子　　瀧川　智志　　松井　秀人
水城まゆみ　　植松　勲　　松本　肇　　松本　征儀
岡崎　勝郎　　宮山　昌子　　中津川伸一　　松岡　康夫
細江　利昭　　小林　幹雄　　犬飼　堯　　池上　一利
辰巳　佳樹　　前嶋　彩江　　山本　喬　　森川誠一郎
安部　元生　　三浦　哲郎　　家吉　幸二　　生駒　祐子
新井　治仁　　石川　雅則　　松本　祐輔　　石井　彦徳
山口　和　　柳原　庸子　　平賀　康雄　　金子　隼人
中野　幸子　　関　喜一　　岡崎　満義　　濱岡日出夫
蔦　清昭　　花田　公行　　富沢　正永　　工藤　一也
宇野　次郎　　飯島　敏雄　　玉井　幸久　　森谷　正彦
安藤　啓子　　吉岡　昭夫　　城田　六郎　　喜多　基
豊田小夜子　　渡部　淳子　　窪田　都香　　田村左千子
飯沼　一之　　志村　典子　　横山　真吾　　佐藤　恵子
本間　久幸　　春日　忠衛　　丹下　和幸　　小林　榮一
川口美智子　　小泉　計治　　京谷　隆男　　三橋　稟也
中山　洋子　　大森　正泰　　大村　雅彦　　岩村　順一
浜辺　又八　　近添　智子　　小林　迪雄　　住田　笛雄
中野　三琴　　香取　和之　　赤間　嘉幸　　岩波　弘道
神田　英昭　　高津　有二　　三谷富美子　　匿名一名

（平成二十八年六月末現在　敬称略）

多大なご支援有難う御座いました。記念事業・行事に有意義に活用させて頂きます。　会長　岡崎満義

神奈川漢詩連盟創立十周年記念行事概要　ぜひご参加ください。

▼十周年記念式典

創立十周年記念式典を次のとおり開催しますので、会員の皆様のご出席をお待ちしています。尚、当日は平成二十八年度定期総会も併せて実施します。

◇　◇　◇

一　開催日
平成二十八年十月十九日(水)

二　場　所
定期総会・記念式典・記念講演
神奈川近代文学館　ホール
サークルの展示会　同館　小会議室
懇親会　横浜中華街　菜香新館

三　スケジュール(予定)
①　平成二十八年度定期総会　一三時～
・平成二十七年度事業報告、決算報告
・二十八年度事業計画、予算案
②　創立十周年記念式典　一三時四〇分～
・神漢連十年の歩み紹介
・創立時功労者に感謝状授与　等
③　記念講演　一五時～
講師　全日本漢詩連盟会長
石川忠久　先生
演題　神奈川漢詩紀行に関するご講演
④　懇親会　一七時～一八時半

▼漢詩大会

漢詩大会

◇日時　平成二十九年三月十七日(金)
一三時～一六時半
◇場所　横浜市開港記念会館　一階講堂
◇プログラム
表彰式、選評、特別賞作品の吟詠
記念講演　全日本漢詩連盟会長
石川忠久　先生

交流懇親会

漢詩大会終了後交流懇親会を開催します。
◇日時　平成二十九年三月十七日(金)
一八時～一九時半
◇場所　横浜中華街内を予定しています

作品集

入賞・入選作品は作品集として、漢詩大会会場にて参加者に配布するとともに、応募者全員に無料配布します。

漢詩大会の漢詩応募の受付期間は、平成28年8月1日(月)～10月31日(月)。当日消印有効です。
先にお届けしました応募要項を参考に応募してください。皆様から多数の応募をお待ちしています。

▼漢詩フェスティバル

◇日程　平成二十九年
三月十六日(木)～十七日(金)
◇場所　横浜市開港記念会館
◇プログラム
①　記念講演　全日本漢詩連盟会長
石川忠久　先生
演題　陶淵明について
日時　十七日(金)一五時～一六時半
場所　一階講堂
②　漢詩を学ぶ、漢詩で遊ぶ、体験コーナー
日時　十六日(木)一〇時～一六時半
十七日(金)一〇時～一二時
場所　二階九号室
③　展示コーナー
日時　体験コーナーと同じ
場所　一階一号室

漢詩大会の前日と当日、体験コーナー及び展示コーナーで、初心者向けの漢詩の作り方を学びます(参加自由)。

神奈川県漢詩連盟の「連盟印」ができました

印刻は本会員の横溝喜久男さんによるものであり、ご寄贈いただきました。又、会員の諸星暢義さんからは鈐印（けんいん）の為の印矩と印泥を賜りました。

神奈川県漢詩連盟会員　個人漢詩集一覧

神漢連会員には、個人で詩集を発行されている方もいます。機会がありましたらぜひご覧になってください。

著者	詩集名	発行日
古田光子	水荭七絶集	平成一九年　五月二六日
中山　清	つくってわかる漢詩の味	平成一九年　八月一五日
横山精真	先生歩いて来ました（漢詩で綴る吟行記）	平成二〇年一二月三〇日
住田笛雄	箆軒主人詩集	平成二二年　八月三一日
松山正明	漢詩集（第四集）	平成二三年一一月
酒井謙太郎	素庵閒情集	平成二四年　六月一二日
岡崎満義／岡崎佳子	二人集（俳句と漢詩）	平成二四年一一月　三日
礒野衛孝	鎌倉漫歩詩草	平成二六年一一月　三日
礒野衛孝	壺中詩藻	平成二七年　三月　三日

編集後記

本冊子作成の背景・目的として、以下の三項目を念頭に進めてきた。執筆者初め皆様の熱心なご努力で、凡そ当初の目的にそって本冊子が作成できたと思っている。

・神漢連は設立十周年を迎え、設立経緯・趣旨や、これ迄の歩みを知らない会員が多数を占めるようになってきている。

・このような背景のもと、活動記録と共に活動趣旨が会員にわかり易く伝わるように、「十年の歩み」を作成する。

・そして、神漢連の良き伝統が次の世代に伝わり、新たな活力をもって更なる展開を図るために、本冊子が参考資料となることを願う。

発刊にあたっては、石川忠久先生と窪寺啓先生から心温まる祝辞を賜り、厚く御礼申し上げます。

本冊子の完成にあたり、原稿の執筆者と共に、以下の方々の貢献が大であり特記しておきたい。大谷明史さんは企業史編纂の専門家として本冊子の構成の骨格を提示し、久川憲四郎さんは一号から十九号までの会報「漢詩神奈川」を丹念に調べてほぼ全ての一覧表を作成し、川上修己さんは掲載写真の準備と各人の顔写真撮影を行った。また、吉岡昭夫さんは会員名簿等運営面での正確な基礎データを提供し、岡崎満義会長は本冊子の題名と各原稿の読者向け見出しを提示した。

尚、本冊子の作成検討・編集メンバーは、田原、桜庭、水城、三村、大谷、高津、川上、久川、柴田（以上敬称略）、及び香取であり、平成二十七年十月の初会合以来活動してきた。

（香取和之 記）

上段左から
高津有二
久川憲四郎
柴田　洋
香取和之
川上修己
右上
大谷明史
下段左から
田原健一
水城まゆみ
三村公二
桜庭慎吾